

2019 年度

ニューサウスウェールズ大学

海外日本語教育実習報告書



お茶の水女子大学大学院

日本語教育コース

目次 1

巻頭言 森山新 2

第1部 実習内容 4

1. 実習の概要 (田敬雲)
2. UNSW の日本語教育 (田敬雲)
3. 実習の内容 (孫維陽、王艷、劉蓉蓉)
4. その他の活動 (竹内美奈、山田美奈、岸枝理)
5. 事前学習 (ファン・チュー・ハー)

第2部 生活 22

1. 大学の諸手続き (岸枝理)
2. 生活 (岸枝理)

第3部 実習での学び 31

岸枝理

田敬雲

孫維陽

竹内美奈

王艷

ファン・チュー・ハー

山田美奈

劉蓉蓉

総評 森山新 49

編集後記 (竹内美奈) 51

巻頭言

森山 新

日本語教育コースの海外日本語教育実習は、2011 年度にニューサウスウェールズ大学（以下「UNSW」）と本学との間に大学間学術交流協定が締結されて以降、翌 2012 年度よりほぼ毎年のように開催されており、今年で 7 回目となる。

2019 年度は尚友倶楽部の奨学金をいただいたこともあり、8 名の院生が参加して実施された。学生たちは、1 年から 3 年までの各学年の授業を担当し実習が行われた。また今年度はサバティカルで来日中のトムソン木下千尋先生が、UNSW の日本語教育の理論的枠組みとなっている社会文化的アプローチや実践共同体の考え方について紹介する「日本語教育学研究特論」の授業が本学で行われる一方で、事前学習として、加納なおみ先生が「日本語教育実習」の授業を通し実際のシラバス作成や教壇実習などについての事前研修を実施した。さらに直前の後期（10 月～2 月）には、UNSW の日本語教育実習について理解を深めるため、実習授業である「日本語教育方法論演習」担当の森山が関連の論文などを引用しつつ勉強会を実施した。

実習生たちの中には、長年日本語教育に携わった経験を有するものから、日本語教育経験がない日本人学生、日本語を母語としない留学生など多様な大学院生であったが、それぞれに熱心に授業の準備を行い、担当教員の指導のもと、教壇実習の授業に取り組んでおり、それぞれの立場で貴重な学びがあったようである。あいにく全世界で新型コロナウイルスが猛威を振るい、オーストラリアに戻れない学生などの影響で履修者も例年に比べ少なく、授業、実習がいつまで続けられるかすらわからない中、第 4 週まではなんとか無事に進められた。しかしながら実習の最終週に入ると、大学の教室での授業中止が伝えられ、我々の実習はそれ以上の前進が不可能となった。そのため当初の予定よりも 3 日早めての帰国を余儀なくされた。UNSW の先生方は、教室での授業からオンライン授業への転換とその準備に多忙を極める中、最後の最後まで親身になって我々学生の面倒を見てくださった。またその思いに応えるべく、学生たちも最後の日まで一所懸命教壇に立った。最後の送別会の場では何人もの学生が涙を堪えることができずに指導の先生に対し感謝の意を伝えていた。

日本語教育を専攻とする学生たちは、単に研究者としてだけではなく、教育者としての顔も有している。さらにグローバル時代において、海外に積極的に出て行き、活動する超国家的、超文化的な社会性も必要としている。その意味でこの海外日本語教育実習の定着・発展は非常に意義深いものと言わざるをえない。また日本語教育研究は日本語教育の発展に資することが要求され、その意味でも研究と並行して海外で日本語教育実践を伴うことは非常に好ましい形であるということができよう。そう考えると、今回、海外日本語教育実習生がこれまで最大の 8 名に増加し、かつ参加した学生が大きく成長してくれたことは、非常に喜ばしいことである。

本報告書は、参加者が実習を通じどのような学びが与えられ、どのような成長を遂げたかということを示すとともに、これから海外実習を行おうとしている学生たちに、実習のよさや意義を伝えてくれるものと思われる。この報告書を読んだ多くの学生が彼らに続き、海外に赴き、教育者としてグローバル人材として大きく成長する機会を得ていただければと思う。

最後になったが、学生を直接ご指導くださった UNSW の先生方、本学学生の送り出し

にご尽力くださったお茶の水女子大学大学院の日本語教育コースの先生方、そして何よりも本プログラムの成功のためにご支援くださった尚友倶楽部の皆様方に心から感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

2020年3月



週1回行われる全体ミーティング風景

第1部

実習内容



実習風景 (Advanced)

1.実習の概要

田敬雲

今回の実習は、「日本語教育方法論演習」の授業として、2020年2月17日～3月16日の5週間にわたってニューサウスウェールズ大学(University of New South Wales, 以下 UNSW)にて行われた。担当教員は森山新先生、参加者は日本語教育コースの学生：博士後期課程3年の劉蓉蓉、博士前期課程1年の竹内美奈、山田美奈、王艶、岸枝理、孫維陽、ファン・テュー・ハー、田敬雲、合計8名であった。実習期間は、竹内美奈、孫維陽、岸枝理、田敬雲の4名が初級の1年生の担当で、王艶とファン・テュー・ハーの2名が中級2年生のクラス、山田美奈と劉蓉蓉の2名が上級3年生のクラスで実習を行った。細かい内容については、次章以降で説明する。

表1 実習の流れ

日付	内容
2019年 4月5日(金)	募集説明会
4月9日(火)	「日本語教育学研究特論」授業開始(トムソン先生)※1
4月11日(木)	「日本語教育実習」授業開始(加納先生)※2
7月18日(木)	「日本語教育実習」授業終了
7月30日(火)	「日本語教育学研究特論」授業終了
11月11日(月)	「日本語教育方法論演習」事前研修開始※3
2020年 2月3日(月)	「日本語教育方法論演習」事前研究終了
2月13日(木)	出国(劉、竹内、山田、王、岸、ハー、田)
2月14日(金)	大学案内
2月17日(月)	授業見学開始※4
2月18日(火)	出国(孫)
2月20日(木)	トムソンゼミ勉強会参加※5
2月24日(月)	反省会※6
3月16日(月)	森山新先生講演会「グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育：理論と実践」
3月17日(火)	実習終了
3月18日(水)	帰国

※1 毎週の火曜日

※2 毎週の木曜日

※3 隔週の月曜日

※4 5日間全てのレベルを見学

※5 毎週の木曜日

※6 毎週の月曜日

2. UNSW の日本語教育

田敬雲

2.1 実践コミュニティ (Communities of Practice: CoP)

実践コミュニティ (Communities of Practice: CoP) は、状況的学習論 (Situating Learning)、正統的周辺参加論 (Legitimate Peripheral Participation: LPP) を理論的背景として Lave & Wenger が提唱したものである。

実践コミュニティは、「領域」 (Domain)、「コミュニティ」 (Community)、「実践」 (Practice) の3つの要素からなり、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団を指す。

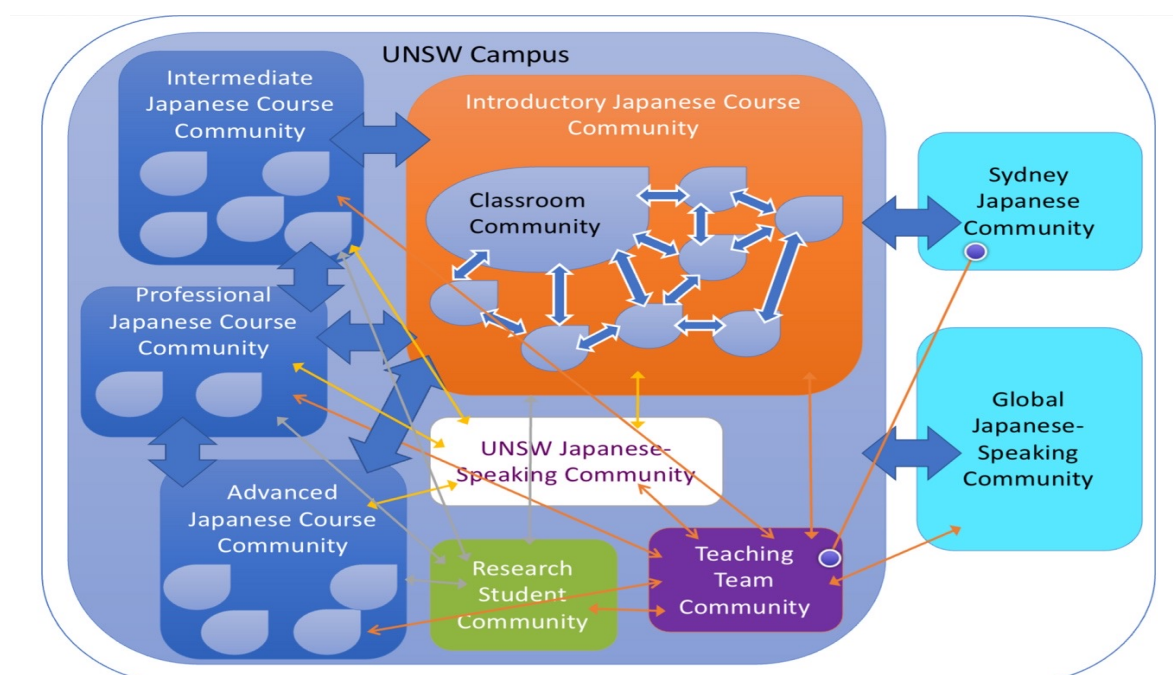


図1 UNSW Japanese Community of Practice

(「日本語教育学研究特論」(トムソン先生担当) 配布資料より)

図1のように、UNSWの日本語コースでは、教師チームが実践コミュニティの観点から、学内に位置する日本語プログラム全体を大きな実践コミュニティにデザインする。日本語を学び日本語で様々な活動を行うことを「領域」とし、多様な活動の場、「コミュニティ」を提供し、各クラス、各レベルなどをそれぞれ1つの「コミュニティ」と考え、いろいろな「実践」が各所で起こっている。矢印が指示しているように、各コミュニティは個々に独立しておらず、相互に交流が行われる大きなコミュニティの場で共存している。

2.2 実践コミュニティの必要性

JFL環境の教室で行われる外国語教育の授業は、学習者が生の日本語に接触したり、日本語を使用したりする機会が少ない。そのため、伝統的な枠を超え、教室外(社会活動など)で必要とされる実践を教室で行うことで、日本語の実際の使用場面を作り出

すことが期待できる。さらに、学習者が他者との相互作用のなかでどのように自身の能力を高めていけばいいのかを理解することができる。

2.3 ジュニア先生

ジュニア先生とは、Professional 以上の学生が Introductory のコースにジュニア先生として参加する Professional コースのプロジェクトの 1 つである。面接を受けてジュニア先生となった学生は授業前に授業の担当教師とミーティングを行い、授業中に学生の質問に答えたり、学生のペアになって練習を助けたり、モデル会話を見せたりする。自己目標などのある「契約書」を記入し、担当教官の評価を受ける。

下級生にとって、ジュニア先生の日本語が上手な場合、あるいは反対に先輩であってもピッチなどの間違いもすることで、日本語を勉強する過程をある程度見出すことができ、将来の自分を想像し、これからの学習目標を明確にすることができる。

上級生にとっても、Professional 授業では多くのドリル、会話練習をすることがなくなるため、ジュニア先生を担当することで、先生と日本語で話す機会が多くなり、話す能力を伸ばすこともできる。また、後輩を支援することで、自分の成長を実感することができ、後輩の質問に答えることで達成感を感じ、自信が持てるようになる。中級以上になり、学習動機が低下することを改善する効果もある。さらに、教えるためには自身も勉強をし直さなければならないので、自律的・持続的な学習を促進できる。

以上述べたように、上級生と下級生の実践コミュニティにおいて、レベル間の交流を活発に行う存在である。

2.4 Moodle

UNSW の公式ホームページからログインして入る、学習用に作られた UNSW の SNS である。Moodle は授業に関する資料、課題提出、プロジェクトについてのディスカッション、先生への質問などに使用されている。

Moodle は教室内の授業と異なり、オンライン上の授業時間外におけるコミュニティの結びつきに役に立っていると考えられる。



2.5 クラス編成

各クラスの編成と担当教員は以下の通りである。

表 2 クラス編成と担当教員

クラス		専任講師	非常勤講師
日本語	Introductory A	トムソン先生、福井先生	大浜先生、赤木先生、鄭先生、三枝先生、平塚先生、中島先生、久保田先生
	Intermediate A	飯田先生	大浜先生、赤木先生
	Advanced A	岡本先生	
	Professional A	橋本先生	

3.実習の内容

孫維陽、王艷、劉蓉蓉

ここでは実習の内容を概観する。1節で初級 (Introductory)、2節で中級 (Intermediate)、3節で上級 (Advanced) について述べる。

3.1 Introductory Japanese A

3.1.1 コース概要

1年生を中心とした日本語初級前半のコースであり、学生は1週間で、Lecture 3時間 (Lecture 1: 2時間、Lecture 2: 1時間)、Tutorial 1時間、Seminar 2時間の計6時間の授業を受ける。実習生は下記表3の赤枠部分を担当した。

担当教官：トムソン先生、福井先生、大浜先生、鄭先生、三枝先生、平塚先生、赤木先生、久保田先生

実習生：岸枝理、田敬雲、竹内美奈、孫維陽

使用教材：『げんき I』 『げんき I ワークブック』 『コースノート』*

*『コースノート』は、活動シートや目標会話など、『げんき I』を補うための教材として使われる。

表3 時間割 (Introductory)

Introductory 実習生(岸、田、竹内、孫)										
時間	月	火		水		木			金	
9:00		Tutorial	Tutorial			Seminar	Seminar	Seminar	Seminar	Seminar
10:00	Lecture	Tutorial	Tutorial						Seminar	Seminar
11:00	1	Tutorial	Tutorial	Tutorial	Tutorial	Seminar		Seminar		Seminar
12:00				Tutorial	Tutorial				Seminar	Seminar
13:00		Tutorial	Tutorial	Tutorial		Seminar		Seminar		
14:00	Lecture								Seminar	Seminar
15:00	1	Tutorial	Tutorial			Seminar				
16:00				Lecture2					Seminar	
17:00				Lecture2						

3.1.2 学習目標

本コースを通じて学生が達成する目標は主に以下の5点がある。

- ①簡単な日本語で自己紹介できるようになる。(出身、大学、学年、学部、専攻を含める)
- ②自分の日常生活について簡単な会話ができるようになる。
- ③ひらがなとカタカナの読みと書きができるようになる。漢字58字が分かるようになる。
- ④日本語話者とインターアクションする時、異文化に気づくことができるようになる。
- ⑤協働学習できるようになる。

3.1.3 Lecture

1年生のLectureはLecture1とLecture2があり、担当はトムソン先生である。今学期の出席者は180名程度であった。主に日本語初級者向けの日本文化の紹介、単語、文法事項の説明やドリル練習などを行う。Lectureの資料(パワーポイント)は毎週Moodleにアップされ、学生が予習できるようになっており、講義の際にプリントアウト又はタブレット、PCなどを持ち込み手元に置いて講義を受ける。

Lecture1

Lecture1は毎週月曜日に大講堂で行い、1回目のLectureは10-12時で、2回目は14-16時である。授業の始めに、日本文化のビデオを流し、その場にいる学生たちを日本の世界へ導く。ビデオ終了後に、今週の授業に関する連絡事項を確認する。今週の目標会話に関する表現や文法項目の説明があり、学生は質問に対して手で○×を示したり、あるいは指で数を出して、大教室での授業に積極的に参加する。学生はペアでデモ会話を練習し、いくつかのペアがマイクで発表する。休憩時には事前にMoodleで募集した学生からのリクエスト曲を1曲選んで流す。授業の最後は先輩先生からのデモ会話についてのパフォーマンスがある。パフォーマンスの前に、先生からいくつか質問事項が出され、パフォーマンスした後学生が答える。出席確認用のワークシートに、学生が自分とSeminarのクラス名を書くが、クラス名を日本語で書くことも練習になる。知っている日本語を書くスペースがあり、学生の日本語のチェックも兼ねている。

Lecture2

Lecture2は毎週水曜日に大講堂で行い、1回目のLectureは16-17時で、2回目のLectureは17-18時である。文字の読み書き練習、教科書の単語を読む練習、今週の目標会話の復習が中心である。休憩時に学生からのリクエスト曲を流す。授業の後半はワークシートを配り、ディクテーションをする。学生の表記が正しいかチェックし、モニターで先生がフィードバックする。ワークシートは出席の証明にもなっている。

3.1.4 Tutorial, Seminar

Tutorialには15クラスある。各クラスは10-15名程度である。担当は福井先生と、大浜先生、鄭先生、三枝先生の4人である。1時間の授業で、宿題のチェック、Lectureで説明を受けた項目の復習及び運用練習を行う。

Seminarも15クラスであるが、クラス登録者はTutorialとは異なっている。Seminarは学生が自分たちでクラスの名前をつける。担当する先生はトムソン先生、福井先生、橋本先生、大浜先生、鄭先生、赤木先生、平塚先生、中島先生、久保田先生の9人である。2時間の授業で、宿題のチェック、Lectureで説明を受けた項目の復習、及び運用練習を行う。今週のまとめのロールプレイができるようになることが大きな目標である。

3.1.5 実習内容

主な実習内容は教壇実習と他の授業への参加と見学である。1年生の教壇実習は毎週水曜日のTutorial、金曜日のSeminarで行った。実習生4人が2人ずつのペアを組み、岸・田組と竹内・孫組という形で実習を行った。

週ごとの実習の流れであるが、毎週月曜日のLecture1に参加し、その週の主な内容を把握した。また、火曜日のTutorialクラスを見学することにより、学生や学習項目について確認した。大浜先生と鄭先生のクラスを中心に見学させていただいたが、見学では学生をサポートすることが主な役割であった。具体的には、ペアがいない学生の練習のサポート、学生の質問への対応、ゲームの参加、その他の細かいサポートだった。

火曜日の Tutorial の指導方法を参考にした上で、水曜日の Tutorial の教壇実習を行った。水曜日午後の Lecture2 に参加し、学生や学習項目について理解した。そして、木曜日の Seminar を見学し、金曜日の Seminar の教壇実習を行った。Seminar の見学はトムソン先生、大浜先生、鄭先生のクラスを中心にを行い、実習生は Tutorial と同様、学生のサポートを行った。

Week5 で、コロナウイルスにより大学がオンライン授業を実施することになり、その週の実習は行うことができなかった。

Tutorial の実習は Week2 から Week4 まで少しずつ実習時間を長くして行った。担当する3クラスのうち、1ペアが2クラス担当し、もう1ペアは1クラス担当という分担で行った。(翌週は交代)。取り組み内容は以下の表4のようになる。Tutorial 終了後、実習生と福井先生の反省会を実施した。

表4 Tutorial の実習内容 (Introductory)

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	講義の復習と自己紹介あいさつ ひらがな	見学及び、学生のサポート
2	1～100の数字練習 時間の読み方 大学名・学年 ひらがな	15分 宿題チェック 数字の読み方のドリル 時間の読み方と聞き方の会話練習
3	自己紹介 (出身・大学) ひらがな	15分 宿題チェック 出身と大学を聞く練習
4	ディクテーションクイズ 名+否定の表現 値段、大きな数字 (千、万) ひらがな	30分 宿題チェック 名詞+否定の表現 (～じゃないです) の会話練習 大きな数字を読む練習 値段を聞く練習
5	時間の復習 移動動詞 (～に 行きます) ・行動動詞 (～を見ます) 等 カタカナ	

金曜日の Seminar の3クラスには、福井先生と実習生(岸、田、竹内、孫)の他に、UNSW の先輩先生が参加した。Week2 から Week4 まで少しずつ実習時間を多くし、Week4 では3クラスとも最初から最後まで実習生が担当した。午前の Seminar の終了後、昼休みに福井先生との反省会を行い、フィードバックを参考にして午後の2つの Seminar で実習を行った。Seminar 後にも福井先生と反省会を持ち、午後の Seminar の反省と次週の打ち合わせを行った。Seminar での取り組み内容は以下の表5のようになる。Seminar では学生を中心にモデル会話の練習とロールプレイを行った。実習生は教師の説明を減らし、学生の言葉を増やすことを心掛けた。学生間のインターアクションにより、学生の学習意欲が高まり、コミュニケーション能力が高まった。

表5 Seminarの実習内容(Introductory)

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	自己紹介 あいさつの練習 ひらがな	クラスの巡回、学生の支援
2	数字の練習 学年を聞く練習 ひらがな	15分 宿題チェック 数字の練習 学年を聞くデモ会話を作成し、練習 まとめのロールプレイ
3	大学生としての自己紹介 名前・大学・学部・学年・専攻 ひらがな	50分 宿題チェック 名前・大学・学部・学年・ 専攻の練習と自己紹介 まとめのロールプレイ
4	こ、そ、あ、どの表現 正しいピッチでの音読 先生の部屋を訪問する会話 カタカナ	2時間(授業を全て担当) 宿題チェック こ、そ、あ、どの練習 正しいピッチでの音読の練習 先生の部屋を訪問する会話練習 まとめのロールプレイ
5	場所と時間を表す表現+助詞・動 詞を使った会話練習 音読 カタカナ	



実習風景(Introductory)

3.2. Intermediate Japanese A

3.2.1 コース概要

2年生を中心とした日本語中級前半のコースであり、学生は1週間で、Lecture 3 時間 (Lecture1: 2 時間、Lecture 2: 1 時間)、Tutorial 2 時間の計 5 時間の授業を受ける。実習生は下記表 6 の赤枠部分を担当した。

担当教官：飯田先生、大浜先生、赤木先生

実習生：王艶、ファン・テュー・ハー

使用教材：『げんきII』『げんきIIワークブック』『コースノート』

表 6 時間割 (Intermediate)

Intermediate (王、ハー)					
時間	月	火	水	木	金
9:00				Tutorial	
10:00					
11:00				Tutorial	
12:00					
13:00					Lecture2
14:00				Tutorial	
15:00					
16:00				Tutorial	
17:00			Lecture1		

3.2.2 学習目標

本コースの目標は、主に 5 点ある。

- ①自分の経験を基に、出来事を語り、複文を使用して自分の考え方を日本語で表明できる。
- ②産出（話す書く）能力を身につける。
- ③自分の産出能力における問題を認識し、評価できる。
- ④対面及びオンライン活動やイベントの参加を通して、日本或いは日本語の知識と日本語のコミュニケーション能力を応用できる。
- ⑤日本語の読み書き活動において、適切な漢字(95 の新しい漢字を含む)、仮名を選んで使用できる。

3.2.3 Lecture

Lecture1

Lecture1 を担当する先生は飯田先生であり、毎週水曜日の 16-18 時に大講堂で行う。登録した学生数は 105 名であったが、コロナウイルスのため、実際来た学生は 90 名程であった。授業の始めに、授業に関する連絡事項をお知らせする。1 時間目は、今週の話題に関する日本文化を紹介してから、文法項目を説明する。2 時間目は新出漢字を紹介した後、ワークシートを配り、学生が回答する。内容はほぼ文法に関する練習問題である。ワークシートは出席の証明にもなっている。

Lecture2

Lecture2 を担当する先生も飯田先生であり、毎週金曜日 13-14 時に大講堂で行う。1 時間の間に、主に漢字、時々文法も含めて紹介する。最後の 10 分間は練習、出席確認用の

ワークシートを配り、学生が回答する。

Lecture の資料(パワーポイント)は毎週 Moodle にアップされ、学生が予習できるようになっている。講義の際に学生はタブレット、PC などを手元に置き、講義を受ける。授業後、Lecture のビデオが Moodle にアップされ、学生が復習もできる。

3.2.4 Tutorial

Tutorial の授業は4つのクラスに分けられている。各クラスは20名程度である。担当する先生は飯田先生と、大浜先生と赤木先生3人である。2時間の授業には、宿題のチェック、文法の復習及び運用練習という三つの部分がある。

3.2.5 実習内容

2年生は他学年と違い、教師間は主に OneNote を利用して授業計画や授業の報告などを連絡する。

実習の1週目は2年生の授業だけではなく、他学年のクラスも回り、授業見学を行った。その次の2週目から、教案を書き始め、Tutorial クラスで教壇実習を始めた。

Lecture1 は水曜日であるため、実習生は教案を水曜日までに OneNote にアップする。その後、飯田先生のコメントに基づき、修正する。

毎回、授業後に OneNote で感想を書き、自分が担当した授業についての反省も書いた。先生方からコメントをいただき、次回の授業を改善した。金曜日の Tutorial と Lecture2 が終わった後、飯田先生とミーティングがあり、今週の反省と来週の授業計画について話した。

実習した授業内容と実習生の取り組みは以下の表7の通りである。



実習風景 (Intermediate)

表7 授業内容と実習生の取り組み

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	アルバイト1 ・自己紹介 ・potential form(動詞の可能形) ・～し、(～し) ・漢字 物 鳥 料 理 特 安 飯 肉	見学 ・自己紹介 ・各グループを回って、学生をサポート ・名札/ワークシートの配布と回収
2	アルバイト2 ・～そうだ ・～てみる ・～なら ・(period)に(frequency) ・漢字	30分実習 ・先輩と一緒に宿題をチェック ・1人1クラス担当し学生と一緒に「～そう」の使い方を練習(実習部分) ・後半はクラスでサポート

	悪体空港着同海昼	
3	贈り物1 ・あげる、もらう、くれる ・ほしい/Vたい(ほしがる/Vたがる) ・かもしれない ・漢字 彼代留族親切英店	1時間実習 ・宿題をチェック ・(30分間のクラステスト) ・1人1クラス担当し、あげもらいの使い方を1時間で練習(実習部分)
4	贈り物2→旅行1 ・～たらどうですか ・も、しか～ない ・Volitional form(意志形) ・～と思う ・漢字 去急乗当音楽医者 死意味注	1時間半の実習 ・宿題チェックの手伝い ・1人2クラスを担当し、「～たらどうですか」「も、しか～ない」2つの項目を1時間半で練習(実習部分)

3.3 Advanced Japanese A

3.3.1 コース概要

3年生を中心とした日本語中上級のコースであり、学生は1週間で、Lecture 3時間（Lecture1:2時間、Lecture2:1時間）、Tutorial 2時間の計5時間の授業を受ける。実習生は下記表8の赤枠部分を担当した。

担当教官：岡本先生

実習生：山田美奈、劉蓉蓉

使用教材：主教材『上級へのとびら コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語』

表8 時間割(Advanced)

Advanced (山田、劉)					
時間	月	火	水	木	金
9:00				Tutorial	
10:00					
11:00				Tutorial	Tutorial
12:00					Lecture2
13:00					
14:00					
15:00					
16:00			Lecture1		
17:00					

3.3.2 学習目標

授業で学んだ文法や語彙などの知識を授業内外のプロジェクトで活用し、実践的な中上級日本語応用能力を身につけることと、日本文化・社会などの理解を深めながら日本語能力の伸長を目指す。

3.3.3 Lecture

Lecture 1

日本語 3 年生全体 (60 名弱) を対象とする講義式授業である。主教材の読解文と関連したテーマのプレゼンテーションを通して予備知識を学ぶ。授業の始めには、前の週の練習文のフィードバックを行う。その後、新しい関連文型を導入し、簡単な練習文や会話文などを作る。授業中約 5 分の休憩時間を設け、学生が紹介する日本の歌の時間 (毎週 1 曲) として使う。その他に、クラスごとに持ち回りで学生が作った練習問題も行う。練習問題には前の週に学んだ文型の問題 (形式自由)、「勇太の旅」というテーマの書き言葉での作文 (1 枚の PPT に収まる長さ)、漢字と語彙の問題 (形式自由) の 3 つがある。

Lecture 2

3 年生全体を対象とし、主教材の読解文の語彙と内容理解にフォーカスする授業である。授業の始めに、ウォーミングアップとして読解文のトピックに関連する会話の活動を行う。語彙の場合、主に読み方と意味の確認となる。内容理解は、読解文のオーディオを聞いた上で、教材にある内容に関する質問を解く形で進め、関連文法項目の使用を促す。

3.3.4 Tutorial

3 年生全体を 3 クラスに分け、Lecture で学んだ文型や主教材の会話文などの応用活動を中心とする授業である。

3.3.5 その他の学生の活動

プロジェクト A (勝手に観光大使プロジェクト)

日本の都道府県の地理や、名物、名所、行事などについて調べ、発表するグループ活動である。この時期に来校する東北大学の学生を含め 5 名前後のグループを作り、1 学期間かけて行う。日本人学生との協働学習活動を行う。

プロジェクト B

Lecture1 で行う練習問題の作成を担当する学習リーダー、Japan Foundation でのボランティア、1 年生の講義のヘルパー、授業の日直 (Tutorial でリーダーとして働いたり、クラス内で作成した練習教材をまとめて先生に送ったりする係) など、日本語を使う学内外の活動をいくつか選び参加する。

3.3.6 実習内容

Week 1 から Week 4 の間、最初に授業を見学し、授業中の活動のサポートをした。Week 2 から授業を一部担当し始めた。その後、徐々に担当部分を増やすような形で教壇実習を行った。毎週木曜日午後、実習生 2 人と指導教員の岡本先生と、今週の授業の改善点や来週の授業の内容などについてミーティングを行った。また、毎週月曜日にほかの学年も含む実習生と指導教員の全員が集まり、授業の準備や授業中の出来事などについて反省会を行った。

実習した授業内容と実習生の取り組みは以下の表 9 の通りである。

表 9 授業内容と実習生の取り組み

Week	授業内容	実習生の取り組み
1	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 ・クラスの命名 ・勝手に観光大使プロジェクト(グループ分け・グループリーダーの選出・発表する都道府県の選定・発表内容の打ち合わせ) 	Lecture 1 と Tutorial を見学
2	<ul style="list-style-type: none"> ・日直 ・宿題チェック ・会話 あいづちとフィラー 質問をする 	Lecture 1 と 2 の見学 Tutorial の会話部分 (50 分) を担当
3	<ul style="list-style-type: none"> ・日直 ・宿題チェック ・会話 依頼と感謝 (基礎) 	Lecture 1 を見学 Lecture 2 のリーディング部分 (50 分) と Tutorial の会話部分 (50 分) を担当
4	<ul style="list-style-type: none"> ・日直 ・宿題チェック ・会話 依頼と感謝 (発展) 	Lecture 1 を見学 Lecture 2 のリーディング部分 (50 分) と、Tutorial を担当



実習風景 (Advanced)

4.その他の活動

竹内美奈、岸枝理、山田美奈

ここでは実習以外の活動について述べる。

4.1 月曜ミーティング (毎週月曜日 12:00-14:00)

毎週月曜日にランチ持参で実施した。トムソン先生、福井先生、飯田先生、岡本先生、橋本先生が参加され、実習生全員が「今週の反省」と「来週の目標」を話し、先生方に講評をいただいた。実習生は自分が立てた目標が達成できているか、反省点と良かった点を報告し、またその他見学した授業について、気づいた点を報告した。1週間単位で自分を振り返り、次の目標を決める自分の指標となるミーティングであった。

実習は学年単位で行われるので、担当学年のことはわかるが、他学年については知らないことが多い。そのため、このミーティングで実習生同士が報告し合い、先生方からご意見をいただくことで、学年間の情報を共有でき、学年を越えて学ぶことができた。1年生から4年生までの縦のつながりを知る大変貴重な場であった。

4.2 トムソン先生勉強会(毎週木曜日 16:00-18:00)

教育実習生の UNSW における立場は Visiting Junior Research Fellow である。そのため、毎週木曜日のトムソン先生の勉強会に参加させていただき、研究活動を推進した。

実習生は毎週2名ずつ、研究計画を報告した。発表の準備のために図書館で資料を探し、書籍を読み直すなど、研究を進めることができた。また、自分の大学とは異なる場で研究計画を発表する機会をいただき、研究を客観的に見つめ、考え直すことができた。

参加されている先生方は授業を実践する教育者であるが、同時に研究者として活躍されており、ご自身の経験を基に、的確なアドバイスをいただいた。



勉強会で発表する実習生

4.3 森山新教授講演会

テーマ:「グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育:理論と実践」

日時:2020年3月16日(月)

場所:国際交流基金シドニー日本文化センター

最初に、森山先生の韓国での日本語教師経験についての話からはじまり、日韓の和解へ導く言語教育を目指すようになった経緯について伺った。そして具体的な教育実践である「日韓セミナー」「国際学生フォーラム」「複言語・複文化プログラム」「ABCモデルを活用した遠隔授業」についてお話を聞いた。それらの実践に参加したことがある実習生もおおり、感想を話す



講演会を終えて

場面もあった。最後に、現在検討している民主的シティズンシップ能力を測る尺度について紹介があり、今後の活用が期待されると感じた。

コロナウイルスの影響で開催当日に ZOOM での実施に変更となったが、オンライン上にはニュージーランドからの参加もあり、現地開催では不可能な遠隔地の人も交えたディスカッションができ、オンライン開催のメリットも感じた。また、わたしたちは講演の前後に国際交流基金の中を見学することができた。図書館には日本語の書籍だけではなく漫画も多く、日本のポップカルチャーの人気を実感した。ガラス張りの教室がいくつかあり、外からは社会人らしき学習者が授業を受けている様子が見られた。

4.4 Japan and Korea: Cultures in Conflict

講師：Dr. Gregory Evon

参加日：2020年2月19日(水) 10-13時

UNSW における日本語コース以外の日本研究領域のコースとして、Evon 先生の「Japan and Korea: Cultures in Conflict」の講義に参加した。このコースは毎週水曜に3時間の講義があり、木曜に1時間のチュートリアルが2コマ開講されている。私たちは実習第1週目の水曜の講義に参加させていただいた。

この日は初回の講義であり、19世紀後半の日韓関係や両国の国際社会との関わり等について概観する内容だった。たとえば、黒船来航を経て開国した明治日本の政治体制と日朝修好条規で開国した李氏朝鮮末期の政治体制、それぞれの政権の宗教への態度の違い、吉田松陰、福沢諭吉、金玉均等が重要な役割を果たしたこと等について学んだ。

講義の場所は大講堂だが、Evon 先生が学生に頻繁に問いかけ、学生が答える、双方向のスタイルで行われた。学生の中には先生の問いかけに対し、非常に詳細に答える人もいて感心した。日韓の歴史について情熱をもって勉強していることが窺えた。

第2週目以降は残念ながら実習のスケジュールの関係で参加することができなかったが、日本語だけではなく、日本の歴史や文化について、海外の大学生がどのように学んでいるのかを見ることができ、大変貴重な機会だった。



新学期開始時、日本文化紹介のために UNSW の学生に浴衣姿を披露

5. 事前学習

ファン・チュー・ハー

ここでは実習以前に行った様々な学習について述べる。

5.1. 日本語教育実習（2019年度前期・木曜日7,8限）

5.1.1 概要

この授業は UNSW におけるオーストラリア日本語教育実習に参加する者にとって必須項目となる。これまで日本語教育現場での指導経験が全くない、あるいは限定的な学生を中心とし、日本語教師に求められる基本的な知識や技能を学ぶ。具体的に、教材分析、教案作成、模擬授業など、実践的展開を試みる。

5.1.2 内容

前半は9回の講義で、後半は5回の模擬授業という形で進めた。

- ・講義：学習者と教材について考え、理解する。教案の必要性、作成方法などを勉強する。
- ・模擬授業：2人で1グループになり模擬授業を行った。具体的には、グループのメンバーで相談し教案を作成した。教員から作成された教案についてコメントと指導を受け、教案を修正した。一人で15分と30分の2回の模擬授業を行った。模擬授業を行う

表 10 授業日程

	月日	内容
第1回	4月11日	オリエンテーション これまでの「授業」を振り返る
第2回	4月18日	学習者を知る (日本語とどこで出会っているか→ニーズ分析)
第3回	4月25日	日本語教科書を知る (テキスト分析)
第4回	5月9日	初級クラスに登場する文型
第5回	5月16日	教材、教具について
第6回	5月23日	日本文化紹介レッスン デモンストレーション
第7回	5月30日	ティーチングプラン・教案
第8回	6月6日	ティーチングプラン・教案作成作業
第9回	6月13日	ティーチングプラン・教案発表
第10回	6月20日	模擬実習(1)-1
第11回	6月27日	模擬実習(1)-2
第12回	7月4日	模擬実習(2)-1
第13回	7月11日	模擬実習(2)-2
第14回	7月18日	模擬実習(2)-3
第15回	7月25日	模擬実習(2)-4

(2019年度のシラバスを引用)

際に、残りの受講生は学習者役を担い、実習する人の良い点、改善すべき点などについて模擬実習評価表を記入した。模擬授業を録画し、授業の後に実習する人に送った。模擬授業を行った受講者は録画を見て、文字起こしを行い、次回の模擬授業に向けて自分で反省点をまとめ教師に提出した。詳細は以下の通りである。

5.2 日本語教育学研究特論（2019年度前期・火曜日 9,10限）

5.2.1 概要

2019年度の前期に UNSW のトムソン木下千尋先生がサバティカルで来日され、お茶の水女子大学でこの講義を行った。テキストは、トムソン木下千尋（編）（2017）『外国語学習の実践コミュニティ：参加する学びを作る仕掛け』を使用し、実践コミュニティの理論とその事例である UNSW での日本語教育について検討した。そして海外の現場と ZOOM でつなぎ海外の日本語教育の実践も学んだ。シラバスに書いてある授業の目的を引用する。

- (1) 海外の日本語教育事情の一部を知ること、日本国内より大きな視点で日本語教育を概観できるようになる。
- (2) 「実践コミュニティ」の概念と実践を理解し、各自の状況における応用方法を考える。

表 11 授業日程

	月日	内容
第1回	4月9日	オリエンテーション 授業内容と授業の進め方を相談する。受講者の疑問を確認する
第2回	4月16日	教科書の第1-3章を検討する
第3回	4月23日	海外日本語教育事(1) 海外の現場（ベトナム）と ZOOM でつないで事情を探る
第4回	5月7日	教科書の第4-5章を発表者を中心に検討する
第5回	5月14日	海外日本語教育事(2) 海外の現場（台湾）と ZOOM でつないで事情を探る
第6回	5月21日	教科書の第6-7章を発表者を中心に検討する
第7回	5月28日	海外日本語教育事(3) 海外の現場（シンガポール）と ZOOM でつないで事情を探る
第8回	6月4日	教科書の第8-9章を発表者を中心に検討する
第9回	6月11日	海外日本語教育事(4) 海外の現場について、授業に参加している留学生から学ぶ
第10回	6月18日	教科書の第10-11章を発表者を中心に検討する
第11回	6月25日	海外日本語教育事(5) 海外の現場（フランス）と ZOOM でつないで事情を探る
第12回	7月2日	教科書の第12-13章を発表者を中心に検討する
第13回	7月9日	海外日本語教育事(6) 海外の現場（ドイツ）と ZOOM でつないで事情を探る
第14回	7月16日	教科書の第14-15章を発表者を中心に検討する
第15回	7月23日	教科書の第16章を検討し、講義の振り返りを行う

（2019年度のシラバスを引用）

5.2.2 内容

全 15 回で、第 1 回は、授業内容と授業の進め方を相談し、受講者と質疑応答を行った。第 2 回目からは教科書『外国語学習の実践コミュニティ』の各章を検討した。初回は教員が中心に行い、次回からは発表担当の学生がレジュメを準備し、リーダーとなって各章を検討し、参加者全員でディスカッションを行った。また、ベトナム、台湾、シンガポール、フランス、ドイツの海外の現場と ZOOM でつなぎ、海外の実践を体験した。

詳細は以下の通りである。

5.3 事前指導

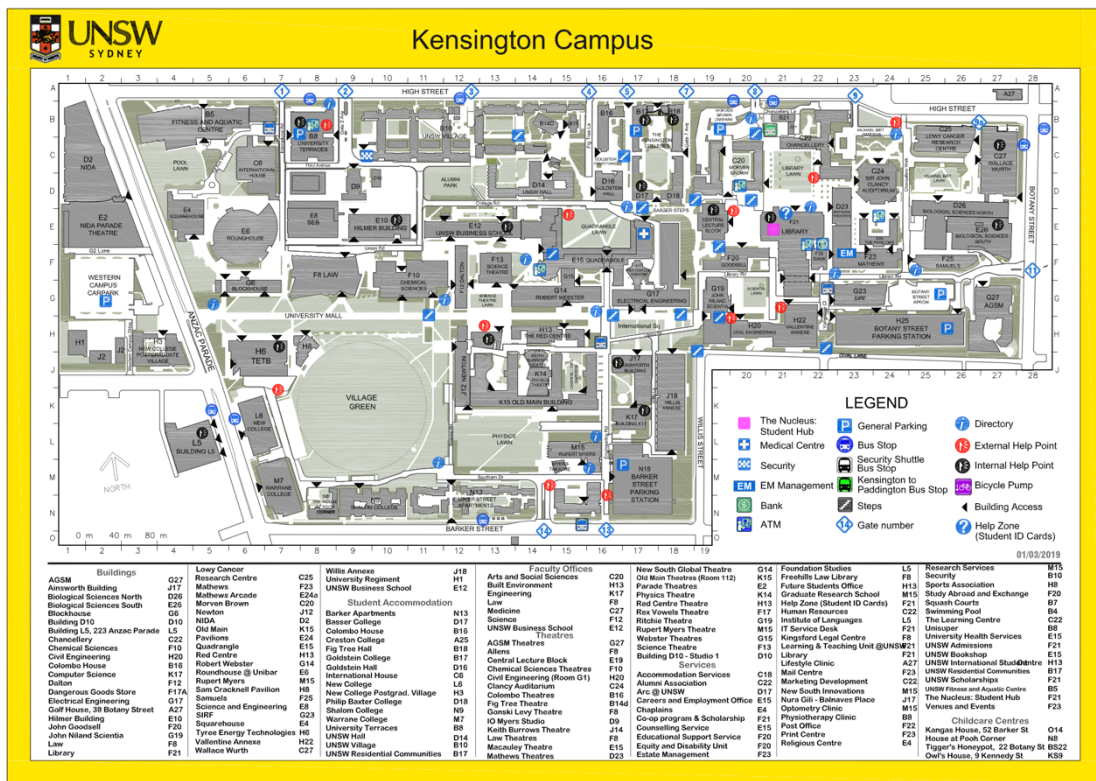
UNSW 日本語教育実習の準備のために、2019 年度の後期に森山新先生によって事前指導が行われた。実習とオーストラリアでの生活に関する準備の相談が行われた。また、UNSW の日本語教育に関する文献を読み、実習生はグループに分かれて発表を担当した。

詳細は以下の通りである。

表 12 事前実習日程

	月日	主な内容	担当者
1	10月25日	旅行会社との顔合わせ、手続きの案内	旅行会社
2	11月11日	各手続に関する話	森山先生
3	12月9日	トムソン木下千尋(2007)「学習環境をデザインする—学習者コミュニティとしての日本語教師養成コース」の検討	山田、竹内、岸
4	1月6日	2018年度 UNSW 海外日本語教育実習報告書の前半の検討	ハ一、田、孫
5	1月20日	Kojima, T., & Thomson, C. (2019). “Personally, I don’t like the whole interacting thing”: Is a Classroom as a Community of Practice for Everyone? Learner Development Journal, 1(3), 60-78.の検討	王、劉
6	2月3日	航空券等書類配布、直前の確認	森山先生

第2部 生活



UNSW のキャンパスマップ

1. 大学の諸手続き

岸枝理

1.1 学内 ID カード

実習初日、大学に到着して先生方にご挨拶した後、学内 ID カードを発行してもらった。具体的な流れとしては、トムソン先生にご紹介いただいた事務の方の案内で大学内の EM Management (写真) へ行き、実習に行く前に受け取った UNSW からの受け入れ許可メールを窓口で見せた。そして、その場で写真を撮ってもらい、その後すぐ ID カードが発行され、受け取った。

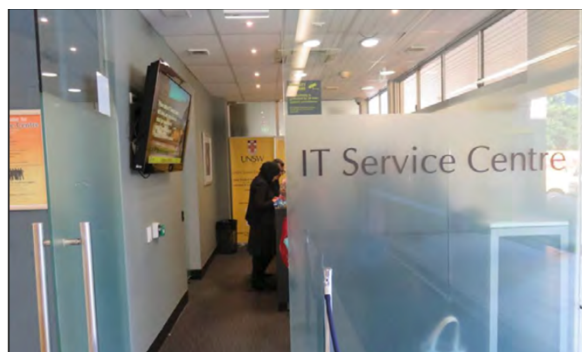


注意点としては、実習に行く前に受け取った UNSW からの受け入れ許可のメールを紙に印刷しておく、又はすぐにスマートフォンの画面で出せるように用意しておくことが必要である。また、EM Management ではその場ですぐ写真を撮るので、身だしなみを整えておいたほうが良い。

発行された ID カードは、実習授業の時だけではなく、実習で使う部屋に入る際に必要となる場合もあるため、学内では常に着用する。

1.2 学内 ID アカウントとパスワード

ID カード発行後、トムソン先生に方法を教えていただき、UNSW の Web サイト上で学内 ID アカウントとパスワードを設定した。この際、何らかの不具合によりログインできなかった実習生は、FM アシストの隣の建物（郵便局隣）にある IT サービスセンター (写真) へ行き、設定してもらった。このアカウントとパスワードは、学内 Wi-Fi や大学パソコンの利用時、学内サイトにログインする際等に必要になる。

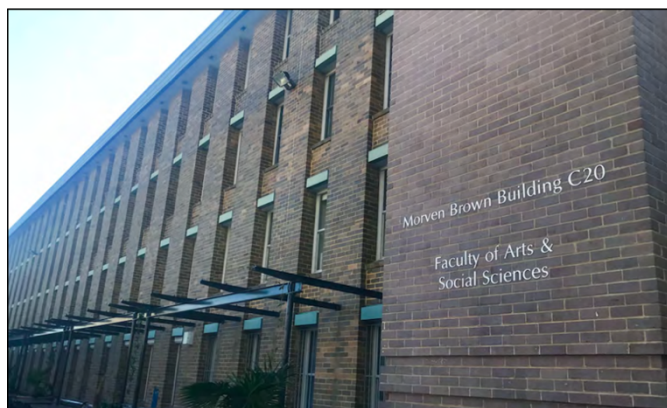


なお、パスワードは初期設定後、任意のものに変更可能である。後で分からなくなると困るので、パスワード変更時には、手元にメモを残しておいたほうがよい。

1.3 学内で主に利用する設備

1.3.1 C20 (Morven Brown)

UNSW の建物には全て記号と名称が付いている。実習中最もよく使う建物が C20 (Morven Brown) である (写真)。C20 の二階に



は、日本語の先生方のオフィスがあり、実習生控室や印刷室など、実習の際によく使われる設備もすべてこの建物にある。なお、授業はこの建物の他、キャンパス中の様々な建物で行われる。

1.3.2 実習生控室

今回は C20 の 2 階に実習生用の控室を二部屋用意していただいた。各部屋にはデスクと椅子 3 つがあり、電源コンセントもあった。授業の前後や休憩時間などに利用した。備え付けのパソコンはいないため、自分のパソコンを持参する必要がある。なお、同じフロアに常勤の各先生方のオフィスや、非常勤講師の方々が共同で使用されている部屋もある。

1.3.3 印刷室

C20 の 2 階には印刷室が 2 つある。無料で USB から印刷したり、教科書の必要な部分をスキャンしたりすることができる。なお、紙は持参しなくて良い。

1.3.4 お茶室・給湯室

C20 の 2 階には大きめのお茶室が 1 つあり、電子レンジ・冷蔵庫や食器の洗い場などが備え付けられており、飲食用のスペースもある。お湯や飲用の水をここでマイボトルに汲むこともできる。この部屋の他にも、電子レンジ・食器の洗い場・給湯器等のみ備え付けられてある小さな給湯室もある。

なお、昼食に関しては、弁当を用意しておき、控室や会議室でのミーティング中に食べるが多かった。また、C20 の 1 階には中華料理店やサブウェイなどの飲食店が入っており、そこで昼食を調達することもあった。

1.3.5 図書館

図書館は UNSW の文字が書かれた背の高い建物で、大学のシンボリック的存在である（写真）。実習生も自由に出入りできる。各フロアに様々な形態の勉強スペースが多数用意されており、実習中の空き時間には図書館で実習の教案作りや報告を書いたり、自分の研究の関連する文献を探したりした。なお、UNSW のキャンパス内で図書館システムにアクセスすると、様々な資料を入手できるため、実習中には積極的に活用するとよい。



1.4 学内 Moodle

UNSW では、授業で先生と学生が情報を共有できるインターネットサービスである Moodle がよく利用される。Moodle では、各コースのページが設けられており、先生が授業の教材をアップロードしたり、学生が宿題を提出したり、イベントや授業についてのコメントを投稿したりすることができる。

担当学年によっては、実習生も Moodle を使用する。その場合、担当の先生により Moodle への追加手続きが行われ、先生と同様の権限で Moodle を使用できるようになる。なお、この追加手続きには丸一日程度時間がかかるため、できるだけ初日に、担当の先生に手続きの必要の有無を確認した方がよい。

2.生活

岸枝理

2.1 費用

2.1.1 仲介会社に支払う費用

まず、航空運賃、海外旅行保険等の費用を仲介会社に支払った。人によって異なる部分もあるが、以下、今回の場合を一例として記載する。

- ・航空運賃 185,910 円（航空券代 167,000 円＋空港諸税等 13,410 円＋予約手数料 5,500 円）
- ・海外旅行保険 22,190 円（申し込み内容及び金額は人によって異なる）
- ・国際学生証 1,800 円

2.1.2 渡航許可（ビザ）に関する費用

渡航許可（ビザ）に関する費用は、日本人学生か留学生かによって手続及び金額が異なる。留学生の場合は、ビザ手数料約 50,000 円及びビザ料金 11,350 円を、仲介会社に支払った。日本人の場合は、オーストラリアの電子渡航許可 (Electronic Travel Authority (ETA)) を、仲介会社を通さず、個人で申請した。ETA は様々な代行会社を取り扱っており、会社によって価格は異なるが、JAL ABC の場合 990 円であった。

2.1.3 その他の費用

上記に加え、宿泊費に約 10 万円（詳細は後述する）、その他現地の食費、交通費、お土産代等に約 15 万円かかった。

2.2 インターネット環境

2.2.1 Wi-Fi

Wi-Fi については、大学構内やシェアハウス内には備わっている。また、駅やショッピングモール等でフリーWi-Fi がある場所もある。なお、シドニー空港のフリーWi-Fi は弱めである。

2.2.2 SIM カード

上述の Wi-Fi を利用することも出来るが、外で移動方法等を調べたり、仲間と連絡を取り合ったりするためには、現地の通信会社の SIM カードを購入し、スマートフォンが常にインターネットに接続できるようにしておいた方が便利である。

現地の通信会社の SIM カードは現地で購入可能だが、シドニー到着時に案内してくれる人がおらず、自力でシェアハウス等に向かう必要がある場合などは、日本であらかじめ購入しておき、シドニー空港に着いたらすぐインターネット接続して経路を調べられる人がいた方が安心である。オーストラリアの SIM カードは、日本でもインターネットで入手できる。日本で購入・設定する際は、アクティベートに 3 日ほど時間がかかるものもあるため余裕を持って用意しておいた方が良い。なお、今回日本で購入したものは、40 日・20GB で約 5,000 円であった。

現地で SIM カードを購入する場合は、シドニー空港や市内のスーパー、通信会社の店舗等で入手できる。通信会社の店舗で購入する場合は、お店の人に設定してもらいすぐネット開通可能だが、スーパー等で購入して自分で設定する場合はつながるまでに 1 日ほど時間がかかるため、注意が必要である。日数・使用可能通信量・値段は様々なプランの

ものが販売されている。

2.3 交通手段

2.3.1 OPAL カード

シドニーでは、OPAL カードと呼ばれる交通カードが広く利用されている(写真)。ほぼ全ての公共交通機関において必要となるため、シドニー空港に着いたらすぐ買った方が良い。空港の鉄道駅の改札窓口で入手可能である。



OPAL カードのチャージ (Top up) は、鉄道の駅、スーパー、ドラッグストア等で行える。また、OPAL カード専用のスマートフォン用アプリがあり、これを用いてチャージ可能であるほか、残額の確認等もできて便利である。

なお、日曜日ほどの交通機関でも、どれだけ乗っても \$ 2.70 しかかからないため、低価格で移動できる。

2.3.2 各交通手段の特徴

移動方法は、Google マップ等のアプリでその都度検索するのが良い。以下に各交通手段の特徴を記載する。

①バス

シドニーでは、バスがメインの交通機関である。乗り方は、自分が乗る番号のバスが来たら、手を挙げて停める。車内でアナウンスやルートを表示はほぼ一切ないので、自分で Google map 等で降りる地点を確認する必要がある。

シドニーのバスは、定刻からずれることが多いため、注意が必要である。現地の方の話によれば、定刻前後 6 分の早着・遅延は当たり前とのことである。特に、早めに行ってしまうこともある点には要注意である。とにかく時間に余裕を持って移動する必要がある。

バスは揺れが激しい場合があるので、車酔いしやすい場合は薬を持っていくとよい。

空港からの移動の際等、スーツケースを持って乗るときは、スーツケースを置けるスペースが限られているため、2, 3 人ずつ分かれて別のバスに乗った方が良い。



空港の 400 番バス乗り場

②電車

電車はバスより利用頻度が下がるが、観光等、シティ方面や少し遠出する際等に使う。

なお、空港までの電車 (エアポートリンク) は金額が高く、\$ 10 以上かかる。少々時間がかかるが、路面バス (400 番) で行った方が安い (\$ 3.73)。但し 400 番には Airport 行きと Eastgardens 行きとがあり、後者は空港まで行かないので注意する。

③トラム（路面電車）

路線は少ないが、行き先に合えば使う。現在、大学周辺の路線が作られている。信号などで頻繁に止まるため、他の交通手段に比べて時間がかかる。



UNSW High Street 駅（Gate 9 付近）

④船

Taronga Zoo 等、シドニー湾の対岸に観光に行く際に使用する。景色が良くて気持ちよい。なお、日曜日ならどれだけ乗っても \$ 2.70/1 日になる交通機関に含まれる。

⑤タクシー等

シドニーでは通常のタクシーのほか、配車アプリがよく使われている。代表的なもので、Uber、Bolt、Ola 等が挙げられる。各アプリで登録してから 1~2 週間間に割引クーポンが発行される。何人かで移動するときは、公共交通機関を使うのと同程度の金額で行けることもあるため、活用するとよい。

2.4 ショッピング

2.4.1 食料品

シドニーの物価は、全体的に東京より高い。特に食料品が高いが、牛肉やフルーツ（マンゴー、ネクタリン、洋梨、スイカ等）に関しては日本より安いものも多い。

食料品はスーパーで購入する。Woolworth と Coles という 2 大スーパーが至る所に見られる他、IGA という少し小ぶりのスーパーや、アジア系のスーパーなどもある。特にアジア系食材や製品が欲しい場合は、大学正門を出てすぐのメイン道路にアジア系のショップがいくつかあるため、それらを利用する。

2.4.2 土産物

シドニー土産を調達する場合は、スーパーや土産物店を利用する。有名なチョコレート菓子の Timtam などは、スーパーで割引をしている時に買うとよい。また、酒類は高い印象だが、ワインは \$ 10 以下で美味しいものが買えると聞く。

土産物店はシティの観光地エリアにたくさんあるが、特に、セントラルの Market City のグランドフロアにあるマーケットがお勧めである。ぬいぐるみ、マグネット、キーホルダー、T シャツ等の多様なオーストラリアらしいお土産が安価で手に入る。Manly Beach の近くの土産物店も比較的安いようである。

具体的によく利用したショッピングモールは、主に Sydney Queen Victoria Building、Market City などである。

なお、シドニーでは東京と違い、多くの店が 18 時頃に閉店するため、注意が必要である。買い物は早めの時間しておくのがよい。

2.5 観光

実習中、週末は教案作成等の他、交通費が安くなる日曜日を中心に、シドニー観光に出かけた。ガイドブック等を日本から一冊持って行くとよいと思うが、以下に主要な観光スポットを列挙する。

- Opera House : シドニー観光の定番である。対岸から眺めるのが美しい。
- Harbour Bridge : オペラハウスの側から眺めると美しい。無料で橋を渡ることができるが、上に登るのは有料である。
- Taronga Zoo : コアラと近い距離で写真を撮ることができる(ただし時間を事前に調べておく必要あり)。バードショーやアシカのショー等、見所がたくさんある。
- Blue Mountains : シティから電車で片道2時間半ほどかかるが、美しく雄大な自然を堪能できる。山なので、夏でも気温は低い。防寒具(薄手のダウンジャケット等)が必要である。日曜に行くと、交通費が\$2.7しかかからないのでお得である。
- Bondi Beach : 晴れている日は、海の色が本当に美しい。ビーチ近くにおしゃれなカフェや雑貨店等もある。ボンダイジャンクションには大きなショッピングモールもある。
- そのほか、シドニーにはハイドパーク、センテニアルパーク等、素敵な公園や植物園が沢山あるため、散歩に行ってみるのも良い。

2.6 宿泊施設

実習期間中、実習生全員でシェアハウスに宿泊した。宿泊先は Airbnb で探した。今回は全日程通して滞在できる場所が見つからず、3つのハウスを利用することとなった。すなわち、期間中、2回引越しが発生した。シドニーの様々なエリアを見られて興味深かったが、引越しはその都度荷造りが発生し大変であることと、UNSW でのミーティングの時間も変更してもらうなど先生方にご迷惑をおかけすることにもなったため、来年度以降の実習生には勧めない。実習に行くことが決まったら、できるだけ早く、学校から近く、条件の良いシェアハウスを、全日程分確保した方が良い。

2.6.1 費用

今回のシェアハウスの費用は、全日程通して総額 784,247 円かかった。参加した実習生は 8 名であるため、一人当たりの費用は 98,031 円である。各シェアハウスの費用の内訳は、表 13 のとおりである。

表 13 シェアハウスの費用

シェアハウス	費用	備考 (宿泊日数)
1 軒目	¥416,330	17 泊
2 軒目	¥143,241	8 泊
3 軒目	¥224,676	11 泊
合計	¥784,247	36 泊

2.6.2 利用したシェアハウスの特徴

今回宿泊した各シェアハウスの滞在期間、具体的な所在地、大学までのアクセス、その他周辺環境について感じたことを以下、記載する。なお、1 軒目と 3 軒目は一軒家で、2 軒目はマンションであった。

① 1 軒目

- 滞在期間 : 2020/2/14-3/2
- 住所 : 91A Renwick St, Alexandria NSW 2015
- 大学までのアクセス : 370 番バス (片道 \$ 3.73) 約 20 分 + 徒歩約 15 分で所要約 30 分。

- ・周辺環境: 徒歩 8 分ほどの所に大型スーパー(Woolworth)があった。鉄道の駅(Erskineville 駅)が近く、シドニー中心地へのアクセスは良好であった。

② 2 軒目

- ・滞在期間：2020/3/2-3/10
- ・住所：15 Gadigal Avenue 15, Zetland, NSW 2017
- ・大学までのアクセス：303, 348 番等のバス（片道約 \$ 2.40）約 10 分+徒歩約 10 分で、スムーズに行けば所要約 20 分。1 軒目より大学までの距離は短くなったが、利用人口の多いエリアだった模様で、バスが混雑し、満員の時は乗せてもらえないこともあったため、通学にかかる時間はあまり短縮されなかった。
- ・周辺環境：徒歩 3 分ほどの所に Coles の入ったショッピングモールがあり便利だった。

③ 3 軒目

- ・滞在期間：2020/3/10-3/21
- ・住所：318 Doncaster Avenue, Kingsford, NSW 2032
- ・大学までのアクセス：大学まで徒歩約 20 分。
- ・周辺環境：近所に 2 大スーパーがなくやや不便だが、付近にアジアスーパーやアジア系の比較的安価なレストランが沢山あったのが嬉しかった。

2.6.3 シェアハウスの設備

- ・寝室：どのハウスでも大体 2~4 人で一つの寝室を使用した。ベッドは部屋により、シングルベッド、二段ベッド、クイーンサイズベッド、マットレスなどが備え付けられていた。2 軒目ではベッドの数が足りず、リビングのソファも 1 名使用することとなった。ハウスによって条件が異なるが、今回のようにオーナー側は大きなソファも 1 名分のベッドとカウントして利用可能人数を提示している場合があるため、人数分まともなベッドが確保できるかという点は、予約時によく確認した方が良い。クローゼットやハンガーラックはほぼどの部屋にもある。エアコンも付いている部屋が多かった。
- ・リビング：ソファ、テレビ、テーブル、アイロン、ゴミ箱等が備わっている（ゴミ袋は置いてある家とない家あり）。エアコンもあった（ただしちょうど夏の終わりから秋にかけての快適な気候だったためあまり使わなかった）。
- ・庭・ベランダ：洗濯物を干す場所として活用した。
- ・キッチン：電子レンジ、冷蔵庫、ケトル、包丁や鍋など料理に必要な基本的な道具と調味料がそろっている。食器類もある。食器用洗剤もあるが、スポンジは自分たちで購入した。
- ・トイレ：1 軒目は 3 箇所、2 軒目と 3 軒目には 2 箇所トイレがあった。共同生活であるため、できればシャワールームと別になっているトイレがある家を選んだ方が良いと思われる。トイレットペーパーは、最初にいくつか置いてあるが、不足分は自分たちで購入した。
- ・洗面所・シャワールーム：全ハウスとも、2 つずつ備わっていた。各ルームにシャンプー、コンディショナーは一応置いてあったが、自分の物を用意して使う人が多かった。ドライヤーは各ハウスとも 1 つずつ置いてあった。
- ・洗濯室：全ハウスとも、洗濯機、乾燥機が一つずつ備わっていた。洗濯洗剤は置いてあるものの少量だったため、自分たちで購入した。
- ・食事：シェアハウスはホテル等とは異なり、食事の提供はないため、各自スーパーで食

材を入手し、自炊を行った。なお、シドニーは東京に比べ、全般的に外食費用が高い。

2.7 気候

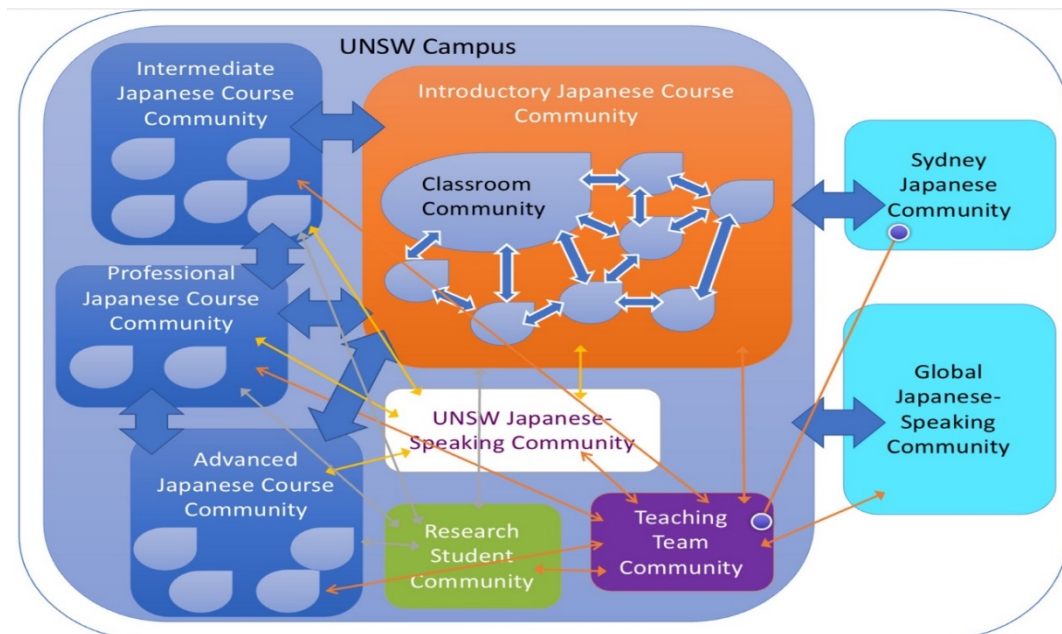
気温については、2020年の夏は例年より低かったようで、全体的に予想していたよりも涼しかった。2月の渡航直後は夏らしく日差しが強い日が多かったが、徐々に秋めいて涼しくなった。真夏の服だけでなく、秋物もあった方が良い。ただ、晴れると紫外線がかなり強いので日焼け対策は必須と思われる。3月になると、薄手のセーターでちょうど良いくらいの肌寒い日もあった。昼夜の寒暖差が大きいため、羽織る物を持ち歩いたほうが良い。薄手のコートを着ることもあった。

また、天気については、シドニーは晴れが多いと言われているが、今回の実習後半は雨が多かった。現地では手頃な傘が入手しにくいこともあり、日本から傘を持っていった方が良いと思われる。嵐のように強風が吹くこともしばしばあった。

湿度に関しては全般的に東京よりも低く、気温が高くても爽やかに感じられた。乾燥しがちなので、保湿クリームなどがあるとよいと思われる。

第3部

実習を通して学んだこと



実習の理論的枠組みである実践共同体（Community of Practice）の考え方（トムソン先生が作成）

岸枝理

1. 教壇実習からの学び

約5週間のUNSWにおける教育実習は、非常に内容の濃い充実した日々で、生涯の財産となるような多くのことを学んだ。実習に先立つ事前学習では、UNSWの日本語教育は、自分が経験したような教師が一方的に知識を提供するタイプの授業とは異なり、実践コミュニティの理論に基づき、学習者主体の協働学習を重視するものであることを学んだ。特に社会で役立つコミュニケーション力を身につけるためには、UNSWで行われているような学習者の主体性を重視する言語教育が有効だと感じ、ぜひそのような教育の現場で体感しながら学びたいと思い、今回の実習に参加した。

学習者主体の授業における教師の役割は、学習者同士の協働学習がなるべく増えるように授業デザインを組み立て、黒子としてサポートすることである。ある程度そのことを理解して臨んだつもりだったが、いざ実習を始めると、教師からの説明が多く、学習者同士のワークの時間が短くなってしまったり、せっかく良い点に気づいた学習者がいても、それを生かせずに終わってしまったりと、自分が過去に経験したような一方通行の授業スタイルになってしまう場面が多かった。毎回の反省会で先生からのご指摘や実習生仲間からの意見を聞いて気づき、改善するために試行錯誤し、実践する、ということを繰り返す中で、徐々に学習者主体で、学習者とともに作り上げる授業に近づいていけたように思う。やはり頭で理解することと、身をもって実践することは別物であると実感した。

また、指導教官の福井先生からは、私たち実習生が授業中に行った活動について、何のためにそれをするのか、目的（学習者にできるようになってほしいこと）と合っているのか、といったことを度々問いかけられた。これについて考える中で、単にスムーズに授業を進行できれば良いのではなく、限られた授業時間で最大限学習者に学びがある授業とするためにはどうすればよいか、よく考え工夫する必要があるということに気づいた。それと同時に、準備した教案にこだわりすぎず、学習者の反応を見ながら臨機応変に対応することの大切さも学んだ。教案を状況に応じて変えることは、最初は怖くてなかなかできなかったが、最終的には少しできるようになった。福井先生は常に私たちの実践をよく見て、その時々私たちの状況・レベルに合わせたご助言をくださり、一人一人が実習の間に教師として成長できるよう導いてくださった。コロナウイルスの影響もあり非常ににお忙しい時期だったにもかかわらず、このように細やかなご指導をしてくださり、心より感謝している。

また、仲間との議論も学びを生み出す上で非常に重要だということを実感した。特に教案作りでは、同じ1年生担当の実習生メンバーと様々な考えを言い合い、協働しながら作っていった。自分一人だと小さく無難にまとまりがちだが、仲間たちは自分では思いつかないようなアイデアを出してくれたりした。皆の意見を掛け合わせてより良いものができあがっていった。授業のリハーサルも、自分一人で練習するよりも、他のメンバーに生徒役をしてもらい気づいたことを言ってもらったり、他のペアの練習を見たりしながらやった方が、断然得るものが多いと感じた。

もちろん、学習者と触れ合う中で学んだことも多かった。UNSWの日本語コースには、実に多様な背景を持つ学習者が在籍している。日本語学習経験、家庭での日本とのつながり、出身地、社交性、得意分野、モチベーション等、一人一人の学習者によって異なる。そのため、課題を行うスピードや出来具合など、様々な面で個人差が存在する。授業におけるこうした個人差への対応はとても難しいが、より多くの学習者により多くの

学びがあるように、という観点から、教師としての経験を培う中で、判断力を磨いていかなければならないと感じた。また、学習者のもつ多様性を、なるべく授業の中で学習リソースとして生かし、学習者同士が関わり合いながら高め合える関係性を作っていける環境をコーディネートできる教師になりたいと思った。様々な質問をしてくる学習者もあり、「学習者はこういうことに気づき、疑問をもつのだな」ということを知ることができて良かったし、それに答えようとして、自分でも実はよく理解できていなかった部分を再確認することもあった。また、実習期間の中で、少しずつ担当学年の学生の顔と名前も覚え、好きなアニメや日本文化についての雑談をする機会もでき、外国語環境における日本語学習者がどのようなことを考えているかを垣間見ることができた。日本が好き、日本文化が好き、だから日本語を頑張るといったことを生き生きと話す学習者を見ると、日本語教師としてのやりがいを強く感じた。

2. その他の学び

実習中は、週に一度、大学院の勉強会にも参加した。自分の修論計画について発表させていただく機会があったが、先生方や院生の方々から、普段の大学院のゼミとは違う切り口のご意見を多数いただき、大変勉強になった。発表後も、関連文献を紹介していただいたり、親身なアドバイスをいただき、自分の研究テーマと関わる研究をされている他大学の先生をご紹介いただいております。お忙しい中、個別にお時間を取っていただいた William Armour 先生、UTS の尾辻恵美先生には、大変感謝している。また、所属ゼミが違うため詳しくは研究内容を理解していなかった M1 同期や先輩の研究についても、発表を聞き、それぞれの研究について知ることができた。このように、教育実践だけではなく、研究に関しても大きく視野を広げる機会となり、非常に良い刺激を受けた。

また、最終週には国際交流基金シドニー事務所で行われた森山先生の講演会『グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育：理論と実践』にも参加した。ご講演をお聞きし、政治的状況を乗り越えて人間同士が理解し合うことの必要性、日本語教師の大きな使命について深く考えさせられた。以前から関心があった国際交流基金の図書館も、この機会に少し見学できて良かった。

生活全般からの学びも多く、初めて訪れたオーストラリアでの生活は新鮮な発見に満ちていた。また、シェアハウスの限られた空間で8人の実習生で暮らした時間は非常に楽しくも濃いものであり、異なる習慣を持つ一人一人が協力し合い、融通を付け合い、生活する中で、今まで自分が無意識に持っていた固定観念に気づかされることしばしばだった。

今回の実習では、様々な人と関わる中で多様な学びを得ることができた。自分一人だと考えを広め、深めることは難しいが、様々なシチュエーションで、多様な背景をもつ人々と意見交換し触れ合う中でこそ、広く深い学びが起こるのだと実感した。改めて振り返ると、本当に得がたい経験をできたと感じる。このような貴重な実習の機会を与えていただき、関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいである。

3. 今後に向けて

今回学んだことは、生涯にわたって様々な場面で生かすことができると確信しているが、まずは現在勤務する日本語学校での授業の実践で生かしたい。私は昨秋から日本語学校で非常勤講師を始めたが、教師から一方的に説明するスタイルの授業になっていたことに、今回の実習を通して気づき、反省した。学校の方針等は尊重しながら、可能な

範囲で、なるべくペアワークや学習者の発話を増やし、一人一人の学習者の個性をリソースとして生かすことを意識し、学習者の主体的な学びを促すような指導方法を工夫していきたい。



田敬雲

1. 教壇実習からの学び

主な教壇実習からの学びは以下の2点である。

まず、実習する前に、「日本語教育実習」と「日本語教育学研究特論」という授業で学習した知識を UNSW 日本語教育現場で活用したことである。実習中常に、実践コミュニティについて考えて、実際に体験したものと文字で読んだ内容を相互にチェックし、理解を深めることができた。例えば、実習生コミュニティを構築するために、ペアの実習生と一緒に教案を作り、教案について意見を交換し、シェアハウスでリハーサルし、授業で助け合い、授業後反省するプロセスを通して、協力して授業をよくしようとする目標が強くなり、実習期間で持続的な交流と学びができた。また、前期の模擬授業を行なったことで得られた「元気な先生」のイメージを生かし、授業をしたとき、笑顔で学生に明瞭な発音で日本語と英語の指示をした。教室の雰囲気作り、学生の支援に良い効果が出たと思う。

次に、実習前には視野になかった学びができたことである。

最も深く感じたことは「教えることは学ぶこと」である。日本に留学している私は JSL 環境において、日本語を間違っても母語話者に指摘されることが少なくなり、日本語力を伸ばす動機が減退している。しかし、今回教師として教えるためには自身の日本語を母語話者のペアと確認し直さなければならなかった。初級レベルの学生との接触することにより、自分自身の日本語力の成長を実感したが、個々の文法項目、語彙の使い方を間違えることもあり、まだ成長する余地があり、必要性があることもわかった。また、「学生中心」の授業を実施するために、教師の役割は何かについても今まで考えたことのないようなことを体得した。具体的には、「学生主体」に対する理解は、授業をするとき、学生の発話を増やすように工夫することであると考えていた。しかし、学生の実践コミュニティが存在する場合、教室内で先生対学生の会話で学生を主体にするだけでなく、学生対学生の学習活動を進めることがより求められている。

これらの教壇実習からの学びを踏まえ、今後の真の成長のために、改善点を述べる。

教案を作る視点は「教師の働きかけ」ではなく、「生徒の学習活動」であることがわかったが、本当に学生の立場に立って、教室での活動を考え、学習目標を達成するためには、目的を持った教案を作らなければならない。

共同で授業をするとき、パートナーの実習生と助け合い、お互いに時間を確認し、実施し忘れた内容を補い、巡回して、授業を担当している教師に情報を知らせることができたが、実習生の学びのコミュニティを作るための交流と協働がまだ足りないと考える。

新型コロナウイルスの影響で、日本語コースを履修している学生数がかかなり減ったが、各学生との交流を深くする必要があった。特徴のある学生の名前、母語、性格、学習進捗を把握したが、どのように学習者のタイプに合わせて支援するかがまだわからない。

授業は事前にデザインした教案通りに行うものではなく、学習者の実際の状況によって変化させるものである。うまくいかない状態になったら、すぐにその原因を考えて、上手に教案、発話を変えて、授業をすることが今後の課題である。

2. その他の学び

教育実習に行く前に、日本以外の海外生活の経験がなかった。生活面で一番印象的なことは弁当を作れるようになったことである。授業で忙しくて授業後すぐ弁当を食べながら反省会を行う場合が多く、料理が苦手な私に、実習生の友達が弁当を準備してくれた。そして、いろいろな簡単な弁当を作る方法も教えてもらい、元気に、忙しい授業に集中でき

るようになった。

実習生グループは学内の実習で一緒に勉強し成長しただけではなく、生活面でも、一緒に旅行したり、メンバーの誕生日をお祝いしたりした。みんながいろいろなことで結びつけられて、親しくなった。短い期間であるが、日本に戻ったら、仲の良い関係が続けられると信じている。

授業を履修している初級レベルの学習者やジュニア先生、ボランティアの先輩との交流ができた。UNSW の学生は留学生が多く、母語の多様性が特徴の 1 つである。中国語を母語とする学習者の中で、北京語、広東語話者が大きな比率を占めている。したがって、オーストラリア国籍を持つ学生の中にも家庭言語が英語ではない学生が多くいる。共通言語である英語の力も多様である。中国語と英語を活用し、学生との距離が近くなって、学生の情報を把握することに役に立った。また、ジュニア先生、ボランティアの先輩と授業の開始前や終了後に、日本語を学習する経験、ニューサウスウェールズ大学、日本語コースの学生、これからの進路などについていろいろ話し合っ、「教師対学生」ではない関係を作った。

3. 今後に向けて

UNSW での実習は私にとって、日本語を教える最初の経験であったので、UNSW の先生方と森山先生と実習生から助言をいただき、充実した毎日を過ごせた。UNSW 教育実習を通じて、これから日本語教育に携わっていきたいという気持ちが強くなった。立派な先生になる自信を持つことができた。

中国では「教師主導」の形で日本語の授業を行うことが多く、教育の現状も複雑である。幅広く UNSW 日本語コースのような実践コミュニティを実施することが難しいと思う。しかし、UNSW で行なっている実践コミュニティの日本語教授法を実際の状況と合わせて中国の日本語教育に生かす試みが必要であると考えます。

私の研究は上級学習者にとっても難しい文法項目の習得に関するものである。しかし、どのような方法で習得の難しい学習内容を教えるか、どのような教授法がより効果的であるかについてまだ検討する必要がある。

今後は、UNSW で学んだことを、母国の教育現場に生かしていけるように頑張りたいと思う。



孫維陽

1. 教壇実習からの学び

事前学習を通じて UNSW の日本語教育実践コミュニティの成り立ち、UNSW の日本語授業の構成について理論側から把握した。さらに、自分が実践コミュニティを理解できた上に、如何に現地で適用するか、自分だったら最初はどこから着手すればいいかなどを少し想像した。しかし、いくら理論を深く理解しても現場へ行かないと机上の空論になると思われた。そして、自分が日本語教師としての素質があるかどうか、自分の授業スタイルはどのようなものか。将来自分がどのような教育観を持つのか、自分がどのような授業の雰囲気、学習環境を志向するか。以上のようなことを知りたいと思って、今回の UNSW 実習に参加した。

1.1 フレキシブルな教案を書くこと

UNSW の日本語授業を見学したときに、UNSW の学生たちを心から羨ましく思い、再び日本語授業を受けたいと思った。

UNSW の実践コミュニティは学生を主体としており、教案を作る時に、教師の一方通行ではなく、指示に対して学生がどのような反応するかを予想し、いくつかのプランを考えることが必要である。また、教案もフレキシブルで各クラスの色に合わせたほうがいいことが分かった。そして、今回担当した一年生は日本語の勉強が始まったばかりなので、授業で指示する時、日本語の指示を多く使わず、英語での説明が多かった。指導の先生からの意見を参考にしたら、教案を書く時、自分の指示がより短くて分かりやすくなった。6つのクラスの学生の反応を想像し、柔軟に対応し、全体をよく考えた教案が作れるようになった。

1.2 活動の目的と評価方法を明確にすること

目的がはっきりしないと有効な授業ではないと思う。想定した教室活動を何のために行うかを考えなければいけない。この案を通じて学生は何ができるようになるか、単に読む練習を増やすのではなく、もしデモ会話があれば、そのデモ会話を使い、学生がお互いに会話できるようになるということである。また、評価する方法も不可欠である。初めての時、教科書からいくつかの練習問題をランダムで取り上げて、学生たちにペアで発表してもらったが、一つのペアが発表する時、他の学生はおそらく自分と関係ないため、あまり聞いていなかった。指導の先生からのアドバイスは練習問題をランダムで取り上げるのではなく、必ずペア活動する時に教室を回り、学生たちの様子を見て、うまくできていない練習問題を最後にクラスで取り上げてペアで発表してもらおうということであった。更に、他の学生の集中力を保つために一つのペアが発表してから、他の学生に質問する、或いはこのペアに対してのコメントを言ってもらおう。このような方法がこの実習の中で一番勉強になった。限られた時間内でより効果的に授業を進め、教師と学生一対一の関係ではなく、学生対学生の形で、皆で練習する機会を増やすようにすることは大変重要である。このような教え方は将来教師として生かしたいと思う。

1.3 クラスのマネジメント

限られた時間内でスムーズに授業を進めるのは最終の目標だと思った。今回の教壇実習を通じて授業の時間配分、各活動間の繋がり、授業最後のまとめなどがクラス全体のマネジメントと実感した。特に4人の実習生がよりよい教案を作りスムーズな授業を進めるという目標を持ち、意見交換し、授業中にもお互いに時間配分に注意し、授業が終わった後も、お互いにコメントし、チームワークができ、相乗効果が得られた。しかし、残念ながら、最後の週はコロナウイルスの関係で前に一步出ることができず、全体的な授業のマネ

ジメントがまだ十分に経験できなかった。

短期間の教壇実習だったが、密度が高く達成感が得られ、自己肯定感も前より深くなった。本当に宝物のような日々であった。将来日本語教師としてのビリーフを確定し、自分はどうのような教育観を持つのかについても深く考えさせられ、大変勉強になった。

2. その他の学び

今回の実習生活はどこでも実践コミュニティだと感じられた。この間、8人の繋がりがりもより強くなった。実践コミュニティの中で人間関係も構築していくことも感じた。

学生に対しては、自分が学生に積極的に話しかけ、学生の質問に対してなるべくわかりやすく説明した。最後には、学生との距離も近くなった。授業中に、自分が英語の

指示がうまくできなかったら、ジュニア先生（二年生、三年生の学生）から助けをもらいとても有り難かった。学生とともに成長していった。

自分の担当するクラス以外の授業を見学でき、他の学年の授業はどのような内容であるかを知った。各学年間がどのように連携しているかも分かった。特に、各クラス担当の先生たちは毎回授業の感想、気付き、改善点、学生の習得状況、クラスの雰囲気などの情報をメーリングリストで共用し、これを参考にして今後の教案を調整する。このような先生たちの連携が実践コミュニティの流動性にとって非常に役に立つと思う。連携意識、情報共有の仕方は将来自分が仕事を持った時に活用したいと思う。



また、毎週勉強会があり、この機会をよく利用して、自分の研究について発表し、皆からのコメントが自分の研究に役に立つことがとても有り難かった。

3. 今後に向けて

今回の実習を通じて、教師としての楽しさを探し、自信を深め、授業スタイルを明確にするという目標が概ね達成することができたと考える。

これまで、自分が日本語教師の経験がないため、先生という立場の意識が薄かったが、学習者の経験を生かして学生たちの気持ちをよく理解し、学生との関係は教師対学生の関係より仲間関係のほうがもっと適切だと思った。

自分は白紙みたいで、今回の実習を通じて非常に成長していった。しかし、まだたくさん学ぶべきところがあると思う。これからの進路もはっきり見えた。特に教師としての楽しさが分かった。UNSWの学生が多様で、多文化の学習環境で日本語を教えるのは難しいところもあるが、面白さもあると思う。実践コミュニティの教育観を今後の人生に生かしたい。これから、多文化社会の進展とともに、多文化の視点を持って、将来日本語教師としての道を自ら拓いていきたいと思う。

竹内美奈

1. 教壇実習からの学び

2019年度前期、お茶の水女子大学でのトムソン先生の講義（日本語教育学研究特論）を受けて、オーストラリアで日本語教育が盛んなこと、特に UNSW では社会文化アプローチを基盤とし、「つながる力」を大切にしていること、また、アクティブラーニングによるコミュニケーションを中心とした日本語教育が行われていることを知った。私は日本語教師として10年以上勤務しているが、勤務先の日本語学校は留学生の大学院進学を目的としており、日本語能力試験や研究計画書の作成に対する勉強が中心である。大学院入試に合格できても、コミュニケーション能力が向上しないという問題があった。この状況を変えるために何をしたらいいかと考えていたところ、UNSW の日本語教育を知り、ぜひ実習したいと思うようになった。親子ほど年の離れた同期とシェアハウスで生活することに躊躇したが、実習への願望が強く参加を決意した。

参加した目的は大きく以下の2点である。

- ①実践コミュニティの現状を体験し、参考にする
 - ②コミュニケーション主体の授業を実習し、今後の自分の授業に反映できる点を考える
- 私は1年生の担当になり、福井先生のご指導の下、4名の実習生と実習を行った。

目標の①については、UNSW での実習を通して、一般的な授業と異なる最大の要因は授業の構成だと思った。1年生の1週間の授業は、大講義室での大人数の「講義」と、少人数で、コミュニケーション主体の授業を行う「チュートリアル」及び「セミナー」で構成されている。実習前の学習で UNSW の授業構成について知ってはいたが、講義主体とコミュニケーション主体の授業が効果的に組み合わせられている1週間のサイクルを実際に体験して、改めてその方法が画期的で効果的だと思った。

②については、学生が話す時間をできるだけ長く作ること、定着するまで何度も繰り返すこと、ペアを変えて行うことが重要だとわかった。教室の正面に教師が立つ必要は無く、立ち位置を変えることが授業に動きをもたらし、多くの学生に近づけるということも実感できた。

また、楽しいコミュニケーションを通して仲間を作る、という目的で日本語の授業に参加する学生が多いということを知り、語学を勉強する目的は一つではないということがわかった。

当初の目標にはなかったが、実習生の仲間と協働で授業を作り上げることの大切さも知ることができた。普段は1人で授業をすることが多く、仲間と共に行うことは、授業に対する考えや経験の差から、違いや戸惑いを感じることも多かった。しかし、最後には協力して授業を作り上げることができた。UNSW で学んだことは多々あるが、協働で授業を行うことが、一番難しく、葛藤を感じ、その分達成したとき喜びが大きかった。

2. その他の学び

私は1年生担当であったが、2年生から4年生までの授業を見学させていただき、各学年の成長を知ることができた。1年生は、始めたばかりの初級で、ひらがなや簡単な挨拶を練習していたが、2年生は、敬語を伴う授受表現などの複雑な文法項目を会話に取り入れる練習ができるようになっていた。3年生は学生同士で文章をピアラーニングで改善し、上級の日本語能力を生かして日本の都道府県を調査する課題に取り組んでいた。4年生になると、先生は一切英語を使わず、重松清のエッセイなど、日本人の大人が普通に読むものを題材に授業が進んでいた。コミュニケーション能力はもとより、読み書き能力も高い

レベルに達することがわかり、UNSW の日本語教育の縦のつながりを理解することができた。

また、週に 1 回勉強会があり、大学院での研究を発表し、先生方から意見を頂いた。私の研究に対して、研究者でもある先生方から熱意のこもったコメントを頂き、大変ありがたく思った。勉強会の機会を得て、実習に追われる毎日の中でも研究を振り返ることができ、人前で研究を発表することで、自分の研究を客観的に見ることもできた。仲間の研究も知ることができ、大変勉強になった。



国際交流基金シドニー日本文化センターでの森山新先生の講演会『グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育：理論と実践』にも参加した。言語教育が政治や歴史的問題の解決に果たしうる可能性と重要性を知ることができた。そして、研究自体の進め方、具体的には、自分の関心を研究につなげる方法、目的を同じくする仲間を見つけて広げる過程や、研究の実践とその実践からさらに研究につなげること、などを示していただき、大変勉強になった。

その他、学内の講演に参加させていただいた。UNSW の Peter Collins 名誉教授による、Corpus-based research on World Englishes というテーマの講演であった。コーパスの活用による、英語を母語とする国々での様々な英語の使用状況まとめた内容であったが、大規模なデータが活用できるコーパスの可能性を学ぶことができた。また、UNSW の講義である Japan and Korea: Cultures in Conflict にも参加させていただいた。19 世紀の日本・韓国について、英語での授業を聞き、先生や学生の皆さんの知識の深さに驚くと共にマクロな視点での歴史教育の魅力を感じた。オーストラリアで日本の歴史が研究されていることに、世界のつながりを感じた。

そして、親子ほどの歳が違う仲間とのシェアハウスの生活は、自分の軸をもちつつ、協力することの大切さを認識する貴重な場となった。私は SNS の利用が苦手で、仲間にとっても助けてもらった。どこからか聞こえてくる歌声や笑い声に日々心が和み、最後にサプライズでお誕生会をしてもらって、とてもうれしかった。

3. 今後に向けて

今回の実習を通じて、協働する方が、お互いの得意分野を生かすことができ、弱点を補うこともでき、成果も学びも大きいことが分かった。仲間同士の横のつながりだけでなく、上級生や先生方との縦のつながり、外の団体との越境のつながりなどがあることも理論と実践両面で認識できた。他との違いを探るのではなく、共通点を見つけて交流の幅を広げることの重要性も実感することができた。

今後は、自分が行う授業においても、学生主体の授業を目指したい。学生同士の会話を増やすこと、活動の際には、目的を明確にし、指示を的確にして、学生が活動しやすい場を作ることを心掛けたい。

また、同じ心がけの仲間を増やして、理想の授業ができる場を創っていきたい。競争ではなく、コミュニケーションを楽しむうちに仲間が増えるような授業が実践できれば、と考える。

王艶

1. 教壇実習からの学び

今回の実習を通して、多くを学び、非常に成長できたと思う。

事前学習と1週間目の見学で、UNSWの教育理念、授業のスタイル、教師の役割、学生の特徴などを少しずつ理解してきたが、教室の前に立って教えるのは初めてだったので、大変緊張し、ストレスも感じた。しかし、先生方は長年の教師経験からの確にサポートしてくださった。教案を何度も直して授業していくうちに、学生たちの中にある「かわいさ」が感じられるようになり、授業の楽しさも感じられるようになった。

最も印象深いのは、先生は一方向的に知識を教えるのではなく、学生の自発的な学びや覚えを促すことがより重要だということである。私は文法を重視する教授法の授業を受けたので、無意識のうちに、学生たちの間違いに注視し過ぎていたようである。実習を続けるうちに、1週間に2回の授業だけで学生が文法項目を完璧に覚えるのは難しいことで、少しずつの積み重ねが大事だとわかるようになった。

また、教案を作る際、できるだけ学生たちの反応を想像して自分の対応を考えることが必要であることもわかった。同じ内容を教えるとはいえ、クラスの雰囲気によって、反応も違うので、柔軟に対応しなければならない。授業中に出てきた質問も、時間が許せば直ちに教えるのではなく、学生自身に答えを促す、あるいは、できる学生に教えてもらうほうが印象に残る可能性が高いことがわかった。

先生と学生、学生間のインターアクションを意識して、雰囲気の良いクラスを営むことが大切だと感じた。そのために、まず、教師は命令的な口調で話すことと使役の言葉遣いを控えめにするようにする。学生が教育の中心なので、教師は上から目線ではなく、学生と同じ立場に立ち、学生の主体性を尊重する。また、グループ間の活動を増やすのみならず、学生たちが体を動かし、グループ間の交流を促進する仕掛けを作るのも「実践コミュニティ」の重要な一環なのではないかと思う。

2. その他の学び

シドニーは私にとって心が癒され、リラックスできる都市だと思う。空も道も広くて、隣に自分より3倍以上高い木が並んで、多種多様な鳥の鳴き声も聞こえる。このような環境では、思わず新鮮な空気を存分に吸い込みたくなる。シドニーは、多様な文化が当たり前前に存在しているように、自分が外国人ということを忘れてもよいほど寛容な都市である。ここでは、オーストリア人向けの外国料理ではない、本場の外国料理が食べられる。ここにいる期間では、自分の心も広がったという感じがした。

生活では、初めて国籍が違う皆と一緒に大家族のような生活を体験でき、楽しかった。今、振り返ってみると、一緒にバス停まで歩いたり、お互いに写真を撮ったり、美味しいものを食べたり、音楽を流して一緒に歌ったり、リハーサルした時、学生ごっこしたりしていた場面が次々と出てきた。幸せな思い出である。自分が気づかないところは、他の人が教えてくれる、自分が苦手なことは、他の人が助けてくれるなど、皆の経験と知恵が補い合って、様々なことができた。

また、『グローバル時代のシティズンシップ教育としての日本語教育の理論と実践』という講演会に参加して、シティズンシップ教育理念を言語教育に生かす重要性を再度認識できるようになった。国家間の対立を解消するために、まず、これらの対立はそれぞれどのようなものか、どこに存在しているかなどが分からないと解決できない。そのため、言語教師は言語と文化を広める人として、学生の異文化理解の深さ、クリティシティ、ア

イデンティティの再認識などに多少とも影響があるのではないかと考えられる。今後の、言語教育におけるシティズンシップ教育理論を用いる実践が期待される。

3. 今後に向けて

短い間での実習から見えたものは、氷山の一角にすぎない。4週間の実習はあっという間だったが、教師ならではの醍醐味を味わえた。教え方は人それぞれ異なり、教育環境も影響する。完璧な教師は存在しないので、自分を否定せず、自信をもって、試行錯誤しながら教えていくうちに、少しずつ成長できるのではないかと考える。一方で、様々な新しい問題も見えてくると考える。先生方からいただいたアドバイスを考え、状況に合わせて解決し、自分の不足なところも改善していきたい。



1. 教壇実習からの学び

実習の前に、2019年にお茶の水女子大学の授業で学んだ実践コミュニティの理論とその実践の事例である UNSW の日本語教育に関してとても興味を持つようになった。今までベトナムの日本語教育しか経験したことがない私にとっては、これは新しい世界のようなもので、実際に実践コミュニティと UNSW での日本語教育はどんな様子か学びたいという意欲が強かった。そして、他の国にある日本語教育はどんな形で行われているかというのを知りたいと思った。ただし、海外教育実習に参加する際の経済的な問題を最初に心配していた。尚友倶楽部様から奨学金を頂けることとなり、今回の海外日本語教育実習に参加できた。

4週間にわたり、授業の見学、教壇実習、教案作成、授業反省などいろいろな体験と勉強ができた。具体的には、1週目では授業の見学を中心に参加し、2週目から教壇実習を行った。2週目では30分の教壇実習を行い、3週目は一時間の授業を担当し、最後の4週目で一時間半の授業を担当するチャンスがあった。UNSW の先生方々のご指導を受け、毎回の実習した授業の反省を踏まえ、次の実習授業に向けてよくできなかった点の改善に取り組んだ。そして、同じ学年を担当した実習生と協力し、お互いにコメントし合い、実習で成長した。また、実習生同士でお互いの実習を見学し、UNSW の日本語コース全体を把握した。

今回の実習で得られた成果はオーストラリアのトップ大学である UNSW の日本語教育の方法の学び、そしてその教室の教壇に立って日本語を教えたことである。以前にテキストで勉強した UNSW の日本語教育は実際にどんな様子なのか1年生から4年生のクラスの見学を通じて体験できた。これらの授業を観察した上で、授業以外の色々な形で学習への工夫の必要性を理解した。そして、UNSW の日本語コースの学生の主体的な学習意欲に感心し、将来自分の学生に対してもそのような主体的な学習意欲を育てたいと思った。UNSW で実習授業を行う際に、最初に自分の行動を中心として教案を作成し、実習したが、最後の4週目になり、学生の行動や考えることを中心にすることに換え、すなわち私の教育の視野が変わってきたと感じた。

2. その他の学び

教壇実習からの学びの他に、UNSW で日本語コースの先生のコミュニティ、学生のコミュニティなど実際の実践コミュニティを観察し、実践コミュニティについての理解が得られた。以前お茶大の授業で実践コミュニティの理論を勉強したが、まだ深く理解で



きていなかったところが多かった。これは恐らく実際の実践コミュニティを実感しないと理解できないと思ったので、今回の実習で実践コミュニティを実感するという目標は非常に期待していた。4週間の後、実践コミュニティを完全に理解したと言える自信はないが、実践コミュニティは実際にどんなものか理解できたと思う。UNSW で私が観察できた実践コミュニティはまず先生のコミュニティがある。先生間の情報共有に対してとても感心した。先生方は自分が担当するクラスの学生だけではなく、同じ学年の学生の把握やコース全体の情報共有も非常に頻繁に行っている。私が担当した2年生では、Onenote という情報共有オンラインシステムを活用し、毎回の授業後の報告や先生間でコメントをし合っていて、先生間のコミュニティが感じられた。そして、クラス内の学生のコミュニティ、先輩セクションでコース全体のコミュニティ、スタディグループの小さなコミュニティにおいても実践コミュニティの存在が感じられた。実践コミュニティの実感と理解が得られた上で、その有効性と重要性が理解できた。

その他、他の実習生と協力し実習を遂行する際に、実習生同士のお互いからの学びもあった。まずは、同じ学年を担当する実習生と一緒に教案を作成し、実習授業を行い、お互いに反省し合ったときに相手から様々な学びができた。例えば、授業の全体の流れについて相談して決めてから分担や教案の具体的な内容などを相談していた。その際に、お互いの意見を聞き合い、アイデアを共有し、相手から新しい発想を学んだ。実習授業を実施し、パートナーの授業を観察し、よくできた点も改善すべき点も観察し、自分の授業に応用した。他の実習生との行動から学びもあった。他の学年の実習授業を見学する際に、学生とのやり取りや授業の進め方について勉強した。そして、実習授業の前の晩に、皆で一緒に住んでいるシェアハウスで授業のリハーサルをし、お互いにコメントし合う活動を通じても学びが生まれた。

3. 今後に向けて

今回の実習を通して、日本語教師初心者としての私は自分の改善すべき点に気付いた。まずは学生中心の授業への工夫の必要性である。授業を行う際に、教師がどのように行動するのかではなく、学生がどのように勉強するのかやどのように知識が得られるかの方が大事であることに気付いた。そのため、今後は学生中心の授業の計画を立てるために工夫したいと思う。その他、授業における学生とのインターアクションもより工夫したいと思う。私は今まで学生の質問に対して答えをすぐあげてしまっていた。しかし、学生の主体的な学習を促進するために、先生が答えを与えるより、ヒントを出したり周りの学生の手伝いを求めたりなどいろいろな形で工夫が必要となる。これらの点を考慮に入れ、自分の授業を向上させたいと思う。

山田美奈

1. 教壇実習からの学び

私は中上級レベルにあたる3年生を担当した。第1週目の授業見学では、UNSWの日本語コースの取り組みである「実践コミュニティ」について観察し、学習者を実践コミュニティに導くための様々な仕掛けがあることが分かった。特に、学習者も授業をつくる一員であるという考えのもと授業がつくられていると感じた。教師が一方に知識を教えるのではなく、教師と学生、学生間のやり取りが多く、また、授業開始時に行う日直や、宿題を発表してクラス全体で添削するなどといった活動も学生を授業に参加してもらうための仕掛けであると感じた。第2週目からの教壇実習では、学習者が積極的に考えたり会話するにはどのような授業が良いかを考え準備を行った。ウォームアップを入れて雰囲気にあたためたり、ユーモアがある文を考えたり、学習者の身近なトピックを入れるように心がけた。

今回授業をした「質問をする」「依頼をする」は、質問や依頼の表現自体は2年生で導入されており、3年生で重要なのは、談話の展開を意識した導入を行うことであった。その導入に悩んでいたところ、学習者の母語ではどのような表現をするか考えてもらい、日本語との比較をするといいと指導教員からアドバイスをいただいた。実際に、授業で取り入れると、学習者が自分の言語表現を振り返り、日本語との類似点や相違点に気づくのに役立ち、学習者も積極的に発言してくれた。学習者が持っている言語をリソースとして使うのは効果的であり、学習者からの発言からこの展開は日本語に特有のため難しいんだと知ることができた。教師も外国語学習者として、学習者から学ぶことがあり、双方向に学びが深まったと感じている。

3年生の授業はレクチャーと少人数に分けられるチュートリアルがある。チュートリアルでは3クラスに分かれるため、同じ授業を3回することができた。様々なクラスで教えるなかで、グループダイナミクスをコントロールすることが重要だと感じた。同じように授業をしてもクラスによって学生から出てくる発言量や反応が違うことがあったり、グループワークではいい答えがでていてもみんなの前で発表となると、発言しなくなってしまうなどということが多々あった。指導教員に相談したところ「グループダイナミクス」という言葉を教えてもらった。集団の行動・態度が個人に与える影響についてで、例えば、このクラスはあまり発言する人がいないから自分も黙っておこうなどといったことが挙げられる。授業内容は同じでも、淡々と進む授業よりインターアクションがたくさんあり活気があるクラスのほうが楽しい。そのためには、教師が発言しやすいようなクラスの雰囲気をつくることが重要であると考えている。今回は学期はじまりで、コミュニティが発達していく前であったため気づけた点であると思う。

2. その他の学び

私たちは、UNSW日本語コースの「実践コミュニティ」だけではなく、実習生の「実践コミュニティ」の一員でもあった。ここでは後者について述べたい。一つのハウスでの共同生活では、お互いに助け合って生活できたと思う。観光地への行き方、ハウスのオーナーとのやり取り、生活用品の買い物など、役割分担を決めなかったものの各自が気づいたことをやりコミュニティに貢献していた。教壇実習前日の夜は、授業のリハーサルをして学習者役になったりアドバイスをするなどして、担当学年を超えてサポートしあえた。このようにして、一緒に観光をし、実習を乗り越えたメンバーとは、良い関係を深められた。しかし、今回の実践コミュニティは完全体であったとはいえ、改善すべき点も残されて

いる。大学院に戻っても実践コミュニティを絶やさずに発達させていきたい。

また、はじめての英語圏での滞在から多くの学びを得ることができた。私は、異文化間コミュニケーションや多文化共生に関心があるため、多文化共生国家と呼ばれているオーストラリアに行くのはとても楽しみにしていた。実際に生活してみると、多文化共生の捉え方が日本とは少し違うように感じた。オーストラリアでは多文化の状態が当たり前で、「共生」という意識さえあがっていないような印象を受けた。一方、日本では、外国人も住みやすいように「配慮」しようという意識が強い気がする。今後、日本でも多文化化がさらに進み「共生」が重要なテーマであると思うが、これまでの「共生」とのイメージが変化し考え直すきっかけとなった。

3. 今後に向けて

実習前は、学習者の質問に全て答えられるのが理想的な先生だと思っていたが、教師は知識を一方向的に教えるのではなく、学習者の気づきや会話を促進する、ファシリテーターであるという認識で授業づくりをすることが大事であると聞き、私の「教師」についての考え方が再構築された。しかし残念ながらすべての大学や日本語学校がこのような教授法を採用しているわけではない。求められている教師のあり方は状況に応じて異なるだろうが、そのなかで UNSW で経験した実践コミュニティの考え方や取り組みを応用することは可能である。そのため環境が整っている UNSW で実習ができたことは自分の強みとなり今後の教育に生かせると考えている。

また、学びは一人ではなく他者とのやりとりで生まれるものだという社会文化アプローチの学習観を経験することができその良さを実感することができた。他者との対話を通じて、言語化することで学びが深まり、自分が気づかなかった視点をもたらしてくれる。今後も、他者とのやりとりを大事にしながら研究生活を送りたい。



劉蓉蓉

1. 教壇実習からの学び

実践コミュニティに関して、事前学習を通して理論を学び、実践例などを読んだが、今まで受けた教育経験と自分が組み立てたシラバスと全く違い、今まで大人数のクラスを教える経験がなく、最初は非常に不安だった。

4週間の実習で、指導の先生、ほかの先生からご指導とアドバイスをいただき、大変勉強になった。実践コミュニティを通しての言語学習は、授業の進め方や教師と学生の役割、授業の形式などが、今までの文法シラバスなどの授業と異なり、コミュニケーションを中心とし、学生の自主的な学習をもとめ、学生同士のインターアクションを重視している。正直、自分の大学時代にこのような教育を受けられていたらよかったと思う。

実習生二人で同じクラスを担当したので、一緒に協力して助け合いながら、教案を書いたり、モデル会話文を作ったり、会話を練習したり、そして、お互いに二人の実習の様子を見てコメントしたりして、チームによるタスクの達成感を味わった。これも実践コミュニティの良さではないかと思う。学生だけではなく、教員同士の交流も求められ、つまずいたり、失敗したりしてもお互いに支え合いながら、学生と一緒に成長していくのも非常に有意義だと思う。

最後にコロナの影響で急遽東京に戻ることになり、指導の先生や親しくなった学生たちと、クラスで最後の挨拶をすることができず、非常に寂しかった。同じ学年を担当する二人の実習生でビデオの形で挨拶をしたが、気持ちが伝われば良いと願っている。

2. その他の学び

今回の実習は、初めての英語圏の国での滞在だった。交通や食生活などを含む生活スタイルなどはこれまでの経験と全く異なったが、外国人に対して寛容で、また女性であるが故の差別などを受けることもなく、特に不便などは感じなかった。

UNSW の先生方が主催した勉強会は学生の発表だけではなく、参加者全員に対して、今週したことと来週することを報告するように要求しているが、これは参加者の勉強や研究に対する内省を促す良い方法だと思う。また、私の研究について、先生方々からたくさんのお話をいただき、非常に勉強になった。

3. 今後に向けて

実習で体験した実践コミュニティの教授法を生かし、学生の立場に立ちながら、自分なりの教え方を見つける。今後、教員になって言語の勉強の楽しさを伝え、知的好奇心を刺激し、言語の知識だけではなく、思考力、判断力などを伸ばしていくことを目指しながら、シラバスの立て方や、授業の進め方、教授のテクニックなどを工夫して頑張っていきたいと思う。

4週間の実習は短かったが、一生忘れられない思い出になる。これからの私の人生を変えてくれる経験だった。



総評

森山新

今回の海外日本語教育実習は、最初から最後まで世界的大流行（PANDEMIC）の新型コロナウイルス（COVID-19）との戦いであった。オーストラリア政府の入国制限に始まり、オーストラリアに戻れない学生ゆえの履修者の減少や授業再編、世界各国の感染者増加、WHOがついにPANDEMICを発令、オーストラリア政府もまた全ての入国者に14日間の自主隔離を命じる。そうした中、我々実習生はそれでもUNSWの先生方に迎えられ、支えられながら、なんとか一歩、そしてまた一歩、前に向かって進んでいた。しかし実習最終週に入るや、ついにUNSWは教室での対面授業中止とオンライン授業への全面移行が通知され、我々の実習ももはやこれ以上前に進めなくなり、お茶の水女子大学からの帰国指示もあり、帰国を余儀なくされた。また昨年度まではノースシドニー女子高校をはじめ、様々な施設を訪問しつつ、オーストラリアの多言語・多文化教育を学ぶ機会も与えられていたが、今回はウイルス拡大防止の観点から、そのすべての学外イベントが中止となってしまった。終盤に国際交流基金で行われた私の講演会も当日中止が発表され、急遽、ZOOMを用いてのオンライン講演会となった。それでもなお、学生の中には、他大学の先生を訪ねたり、図書館で必要な文献を収集したりと、自身のできることを行っていた。

このような厳しい環境の中にありながら、この教育実習が無事終わることができたのは、一重にUNSWの先生方の熱意あふれるご指導の賜物であったと思う。この場を借りて参加学生共々、心から感謝の意を評したい。

学生たちもそのような世界的危機の状況のためか、心のどこかに緊張感を持ち、先生方の熱心な指導に応えようとしていたのであろう。最後の送別の場ではそういった思いを堪えきれずに思わず涙する学生も少なくなかった。また実習の途中から私が参加した際にも様々な困難を堪えつつ実習を行っていたからであろう、その時も涙を流す学生の姿に彼らの熱い思いを感じたりもした。

振り返ると、指導する側も指導される側も実に困難の多い2か月であった。しかしその中でも、あるいはそのような中だからこそ、得られた学びも多かったことと思う。もちろん学生たちの流した涙には、達成感、感謝の涙、苦勞ゆえの涙、そして苦勞を共にした先生方とのお別れの涙だけでなく、思い通りに実習ができなかった悔し涙もあった。しかしそのような涙はどれも、さらなる夢や課題に向けて歩む原動力となるはずであり、未来の「私」にきっと大きな発展を与えてくれるものであると思う。苦勞が多かった分、涙が多かった分、学生たちは大きな何かを学んだと確信している。

UNSWの実習は社会文化的アプローチや実践共同体など、様々な理論的背景をもとに、教員と実習生、そして学習者が一体となって学びを得るという特徴を有している。この実習をさらに実りあるものとするためには、参加者一人一人が、こうした理念に対する理解を深め、目の前の学習者のコンテキストに合わせて自身の教育実践に柔軟に使い、ともに学び、ともに成長することが重要である。私自身も今回7回目の実習指導となったが、この考えをどれだけ理解し、実践に活かせるかが、この実習のさらなる成功に直結すると実感している。今回得た様々な学びを、来年度以降の実習につなげていきたい。参加した学生たちもまた、こうした理念を一つの尺度とし、今一度自身の今回の実践を振り返り、改善すべきは改善し、未来のさらに一歩進んだ自分となるための実践や研究に活用していただければと思う。

国際交流基金で行った私の講演では、多様な「異なる他者」が共生するグローバル社会

にあつて、第二言語教育、第二言語教師の役割が非常に重要であることを述べた。今回の海外日本語教育実習に参加した学生たちが、今回の学びを糧に、異なる他者を繋ぎ、ともに生きる世界へ導く一人となってくれることを期待したい。



最終日、福井先生を囲んでの昼食

編集後記

竹内美奈

2019年は、UNSWのトムソン木下千尋先生がサバティカルで来日され、私たちはUNSWの実践コミュニティや世界の日本語教育について直接御指導を受けることができた。先生から直接お聞きするUNSWの日本語教育にぜひ触れてみたいと思った。

そして、この思いの実現のために、いろいろな方々にお世話になった。

特に、尚友倶楽部から奨学金をいただき、5週間に及ぶ海外での実習を金銭的にも心理的にも負担なく行うことができた。渡航費や滞在費、長期間アルバイトを休むことなど、参加を躊躇する材料は多く、大きな目標を前にして足踏みすることがあるが、ご支援いただき、前に進むことができた。お蔭様で、私たち8人の研究者の卵が貴重な経験をすることができた。心からお礼を申し上げたい。

昨年度までは8月からだった実習が、今年度から2月からになり、ちょうどUNSWでは新学期に当たる忙しい時期となった。さらに、今年はコロナウイルスの問題で、先の見えない不安がいつも存在し、状況も日々変化した。UNSWの先生方は大変だったと思うが、それにもかかわらず、私たちを温かく受け入れて、熱心にご指導していただき、本当にありがたく思っている。各学年担当の福井先生、飯田先生、岡本先生、橋本先生、そして、多くの先生方にお世話になった。東京でお別れしたトムソン先生が今度はシドニーで変わらぬ笑顔で迎えてくださり、ご活躍を目の当たりにできた。

また、実習担当の森山先生には、年度の初めからご指導とご尽力を頂いた。理論的なご指導はもとより、シドニーでの生活についてもご配慮いただき、煩雑な事務手続きも助けていただき、細やかなお心遣いに感謝している。

多くの方に支えていただき実現したこの経験を、今後の研究や教育活動に生かしていきたい。シェアハウスで寝食を共にし、実習で共に頭を悩ませた8人のつながりも大切にしていきたい。

来年度以降もこの実りの多い実習が続き、多くの学生が参加できるよう、私たちが伝える努力をし、バトンをつないでいきたいと思う。

2019年度ニューサウスウェールズ大学海外日本語教育実習報告書

発行日 2020年3月31日

発行 お茶の水女子大学大学院日本語教育コース

住所 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学

電話 03-5978-5211

URL <http://www.dc.ocha.ac.jp/m/c-cultures/jle/>

編集 参加者一同・森山新